法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

琉球方言の分布図 : 母音体系・ハ行音・カ行音・タ行音

中本, 正智

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
199
(発行年 / Year)
1979-10-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012751

Hosei University Repository

琉球方言の分布図
—母音体系・ハ行音・カ行音・タ行音—

中本正智

目次

琉球方言の母音体系の分布
ハ行音 —— 花・肘・蓋・鰣・骨・ハ行子音の総合図
カ行音 —— 風・肝・傷・口・煙・これ・カ行子音の総合図
タ行音 —— 旅・乳・綱・手・鳥・タ行子音の総合図

琉球諸方言の音韻については小著『琉球方言音韻の研究』(法大出版局)において，奄美・沖縄・宮古・八重山・与那国の主要5方言の構造を比較検討し，これを概観するとともに音韻の変化過程を考察した。小著では全体に琉球諸方言の音韻の法則的な側面をとりあげたのであった。

音韻の変化は極めて法則的である一方においては，音韻的環境により，また語の出自や中央文化の波及関係の相違により，語ごとに異なる面をもっている。琉球方言の歴史的過程を明らかにするには，語ごとに，その音韻現象を分析して琉球全域の分布状態を考察することが重要となる。

母音体系とハ行音・カ行音・タ行音の分布図をえがいてみた。母音体系は一語一語の変化を考察するときのバックボーンとして重要である。ハ行・カ行・タ行の子音 p k t は，破裂音という音韻的性質を同じくする面をもち，その変化も相互に関連して行なわれるところがある。音韻の相関性を無視するわけにはいかない。

以下、それぞれの分布図について考察しよう。

「琉球方言の母音体系の分布」

琉球方言の母音体系は，推移型と構造を組み合わせて分類することができる。

推移によると

Ⅰ型—イ段母音は変化しないのでエ段母音が e → ï (→ i)のように変化しているもの。

Ⅱ型—イ段母音も i → ï (→ i)のように変化し，エ段母音も e → iのように変化しているもの。

のように分類できる。Ⅰ型は奄美・沖縄全域の北琉球に分布し，Ⅱ型は宮古・八重山・与那国全域の南琉球に分布している。

構造によると

A型—5母音(i・e・a・o・u)の他に ï・ëをもつもの。

B型—5母音の他に ïをもつもの。

C型—5母音のもの。

D型—3母音(i・u・a)のもの。

のように分類することができる。A型は，Ⅰ型の中では奄美大島・徳之島の全域に分布し，Ⅱ型の中では波照間島に分布している。B型は，Ⅰ型の中ではわずかに喜界島北部と沖永良部島

Hosei University Repository

国頭に分布し，Ⅱ型の中では圧倒的に多く，宮古・八重山に分布している。C型は，Ⅰ型の中では沖縄全域と与論島・沖永良部島・喜界島南部に分布し，Ⅱ型の中では八重山の黒島・鳩間島・西表島西部に分布している。D型は与那国島だけに分布している。最近では共通語の影響でe・oを取り入れ5母音の構造になりつつある。

琉球方言の母音体系が歴史的に北琉球のⅠ型と南琉球のⅡ型に大きく分かれていった様子が分布図でよみとれるのであるが，これがどのような体系から，いつごろ分かれたかについては，多くの語をあげてさらに考察を深めなければわからない。

ハ　行　音

「花」

p音をとどめるパナ系は南琉球に勢力をもって分布している。波照間島・新城島・小浜島・石垣島川平・西表島にpḁnḁがみられる。この地域の方言に無声子音とn・m・rにはさまれた母音が無声化する現象が起こっているためである。

北琉球でp音をとどめる方言は，沖縄本島北部の，とくに名護・本部半島・伊江島を中心にまとまった分布相をみせる。沖縄本島の周辺部は北端の奥・安田に，東南部の津堅島・久高島に点在している。そのほか，奄美では与論島がもっともさかんであり，喜界島北部と奄美大島佐仁にもわずかに見られる。

φ音をとどめるファナ系は北琉球のp音の周辺部にみられる。

h音は北琉球に圧倒的に多く，沖縄本島中・南部地域と沖永良部島・徳之島・奄美大島・喜界島南部をおおっている。

語末母音の長音化をみると，沖縄本部の名護・本部半島・伊江島のpana:，伊是名島のφana:，伊平屋島・沖永良部島・徳之島西部のhana:のように一つの勢力圏をもっていることが注目される。この長音化はアクセントと関係する現象のようである。

「肘」

p音のすがたは，ほぼ「花」と同じである。p音をとどめるピジ系は南琉球に多く，北琉球では沖縄北部と与論島・喜界島北部・奄美大島佐仁に分布している。沖縄北部でpʔidʒi:のように無気喉頭化音に変化しているのは，「花」のp音と異っている。これはe→i，o→uという母音の高音化によって本来の狭母音音節の破裂音が無気喉頭化の現象を起こしたためのものである。

伊江島ではtidʒi，与那国ではtʃʔidiŋkaのように変化している。

奄美の与路島や請島では母音の変化に伴ってxët，xï:tʃのように軟口蓋摩擦音に変化している。

φ音をとどめるフィジ系はp音の周辺に多く分布している。

ç音のヒジ系は沖縄中・南部を中心に，沖永良部島・徳之島・奄美大島・喜界島南部など，北琉球に勢力がある。φ→çの口蓋化が急速にすすんでいるのは，母音iの影響によるものである。

徳之島にはsïdʒïのようにサ行音化している方言がみられる。

「人」の語頭音piは「肘」のpiよりも変化がすすみ，北琉球の多くの方言で脱落現象を起こしていることは，すでに「首里王朝の言語(2)」（本書所収）で考察した通りである。

Hosei University Repository

「蓋」

p音のすがたが他の段と異なる南琉球は「花」にしても「肘」にしても p音の優勢地域であったが，「蓋」においては p音が一例も現われない。

南琉球では，ウ段音が pu→ fuの変化を経ているからである。この変化は，この地域の母音変化と密接に関係している。これについては中本1976；p. 238 を参照されたい。 futaは宮古全域に分布し，八重山では fu→ φuの変化によって φutaになったものである。

北琉球の p音のすがたは「花」などとほぼ同じである。ただ恩納や久高島で無気喉頭化音になっている点が異なる。北琉球の φuta は南琉球の fu→ φuの変化とは異なり， pu→ φuの変化を経たものである。

喜界島湾では語頭音が脱落して t'aになり，与那国島でも同様に t'a：となっている。

「鰣（へら）」

p音のすがたは「花」と類似している。φ音をとどめるフェラ系が奄美大島・徳之島に勢力をもっているのが注目される。これはエ段母音が中舌母音 ïになったため， φ→ çの口蓋化の変化がおくれたと見ることができよう。すでに見たように「肘」において φ→ φの口蓋化が急速に起こっていることと対比されよう。

口蓋化された çiraは， 沖縄本島中・南部や沖永良部島で多く現われている。これらの地域にはエ段母音が iに変わった方言が分布している。

「骨」

p音のすがたは「花」と類似している。 p音のほかはすべて φ音のフニ系に変化している。これは u母音の唇音性によるものである。 u以外の母音への変化がないので， çなどの子音もない。

「ハ行子音の総合図」

以上は，ハ行音について各段から一語ずつとりあげて分布図をえがいたのであるが，さらに多くの語を参考にして総合図をつくってみた。

A1は全段で p音をとどめているが，イ段・ウ段の狭母音音節で無気喉頭化の現象が見られる。これは沖縄北部に勢力をもっている。

A2は A1に類似するが，広母音音節のア段・エ段・オ段で pの破裂性がやわらかくなって φに近づいているすがたである。これは久高島や喜界島北部に分布している。

A3はイ段・ウ段で喉頭化音を失って全段が p音になっているものである。奄美大島佐仁・与論島・沖縄津堅島に分布している。

A4はイ段で p→ tの変化を経ている。これは伊江島だけでみられる。

A5は A1のすがたがくずれたものと察せられる。イ段とエ段の母音 iの前で p' であり，他の段ではすべて φに変化している。沖縄本島北部にみられる。

以上はハ行 p音をいずれかの段でとどめている構造である。

A6・A7は p音を失ったすがたである。沖永良部島などは，カ行子音が h音化しているにもかかわらず， p音も h音化している地域である。沖縄中・南部と奄美大島・徳之島は，カ行子音が kのままで，ハ行 p音を失っている地域である。

B音は南琉球に分布する構造であるが，ウ段ではすべて p音を失っている。

B8はウ段子音が fで，他の段では p音をと

Hosei University Repository

どめている。これは宮古に勢力がある。

B10はfがφに変化したもので八重山に勢力がある。

B9はB8のすがたからp音を失ったすがたで，宮古の池間島・佐良浜・西原にある。

B11はB10からp音を失ったもので，与那国島にある。

ハ行子音の変化はカ行子音との相関において考察を深めねばならない。

カ　行　音

「風」

k音をとどめるカゼ系がもっとも基本的である。

k音がh音化しているハゼ系は沖縄北部を中心にその属島をつつみこみ，与論島・沖永良部島・喜界島にひろがる一大勢力圏を形成している。奄美大島では佐仁だけに見られる。沖縄南部の久高島もh音である。

久米島の鳥島にもhadiがある。鳥島は本来，久米島の北東方，徳之島の西方に浮かぶ小島であるが，その住民は大正期に久米島具志川村の沿岸部の仲泊に隣接したところに寄留した。現在でも久米島の鳥島方言は隣りの仲泊など久米島本来の方言とは異なっている。鳥島の方言はむしろ沖縄北部圏の方言に近いといえる。

「風」の第2音節をみると，その子音が破裂音dである方言と破擦音dz，dʒなどである方言とがある。破裂音dをもつ方言は喜界島と奄美大島南部に集中し，徳之島の東北部，与論島を中心に沖永良部島西部と沖縄本島北部，沖縄南部では粟国と久高島，宮古の西側の周辺部，多良間部，与那国島に分布していることになる。

沖縄糸満などでは「風」のことを ʔiki という。これは「息」に対応する語である。窓から取り入れるのは「いき」であって「かぜ」ではない。沖縄では「かぜ」は「台風」の意味にずれている場合が少なくない。

「肝」

k音をとどめるキモ系が基本的なものである。喉頭化音のkʔは沖縄北部と奄美大島でさかんである。

kが破擦化したチム系は沖縄中・南部を中心に，本部半島と伊江島・伊是名島・伊平屋島・沖永良部島東部・喜界島南部にひろがっている。これは，おもろ時代から首里を中心にさかんに起こった口蓋化現象の流れをくむものである。南琉球ではkの破擦化は少ないが，池間島・伊良部島・宮古島東部の保良に tsïmu がみられる。これは首里を中心に起こった口蓋化現象と直接関係するものではない。おもろ時代の口蓋化現象は宮古・八重山の方言には波及しなかったことがわかる。

k→hの変化がさかんである沖縄北部においても，イ段の「肝」の場合には k→çになる例はみられない。

与那国でkʔimu が現われることもあるが，tʃʔimu が本来の与那国方言の語形である。tʃʔimuŋuti（胸）の語形をみてもそれがわかる。最近では喉頭化音の乱れが起こっている。

「傷」

k音をとどめるキズ系が基本的なものである。喉頭化音のkʔは奄美大島でさかんである。徳之島・喜界島・沖縄北部にも点在する。

「肝」では破擦化 k→tʃの例が多く現われたが，「傷」では破擦化がほとんどみられない。

宮古方言ではキに対応する音韻は kï であるのに，「傷」の語頭音は ki であって kï にな

Hosei University Repository

らない。これについては拙論「南島方言の概説」を参照されたい。

「口」

北琉球ではk音をとどめるクチ系が分布し，南琉球ではku→fu の変化を経た宮古方言と，さらにku→fu→φuの変化を経た八重山方言が分布している。与那国では語頭音が脱落してt?i:またはt?ibuniになっている。

「煙」

琉球全域がほとんどケブシ系で統一されている。k→çの変化によってヒブシとなるのは沖縄北部と沖永良部島・喜界島である。

ケンブシ系は与論島にみられる。

宮古では第2音節がfuまたはvに変化してkifusï，kivsïのようになる。

「これ」

k音をとどめるクリ系が基本的である。k→φの変化を経たフリ系は沖縄北部・与論島・沖永良部島・喜界島・奄美大島佐仁に分布している。

「これ」の第2音節のr音が脱落してkuiとなっているのは宮古島にまとまった勢力として分布している。

ウリ系も点在している。これは「それ」と「これ」との意味区分の問題とかかわるものである。

『カ行子音の総合図』

カ行子音のもっとも基本的なすがたはA1である。e→i，o→uの高母音化によって本来のイ段・ウ段がk?のように喉頭化しているものが多い。奄美大島・徳之島に大きな勢力をとどめている。

A2はイ段が破擦化しているもので，首里を中心とする沖縄中・南部に大勢力として存する。A3は，これがさらに摩擦化したもので金武の周辺に分布している。

A4からA8までは広母音音節でk→hの変化を起こしたもので，沖縄北部及びその属島・与論島・沖永良部島・喜界島に分布している。これらの中にはイ段子音が破擦化したものもある。

南琉球ではウ段音でku→fu（→φu）の変化を起こしている。これはハ行音のpu→fu（→φu）の変化と呼応している。この変化は母音変化によってひきおこされたものと考えられる。

南琉球のうち，キがtsïになる方言は宮古の池間・伊良部島・来間島・宮古東部の保良など周辺部に見られる。波照間島・竹富島では摩擦音になっている。

南琉球ではk→hの変化は少なく，黒島・新城島・波照間島にわずかに見られるだけである。

与那国島は本来，八重山方言の流れをひくものであるが，狭母音音節がさかんに脱落する。

タ　行　音

「旅」

t音をとどめるタビ系がほとんどである。無気喉頭化音は現われない。tがサ行音化したサビ系は沖縄北部の佐手・宇嘉にわずかに見られる。久高島の r̥abi はサ行音と同類と見られる。

「乳」

破裂音をもつti:がわずかではあるが沖縄北部に見られる。主流は破擦音tsまたはʧである。無気喉頭化音は奄美大島・喜界島・徳之島

Hosei University Repository

・沖永良部島・沖縄北部にまとまった勢力としてある。

中舌母音をもつ形は宮古・八重山が中心である。ただし，徳之島でも中舌母音をもった ts$^{\gamma}$ï：が現われる。

ʃi：は沖縄北部の津堅島・宮城島や八重山黒島・鳩間島などに現われる。

「綱」

t音をとどめるティナ系やトゥナ系は奄美大島南部にまとまって分布し，喜界島・沖縄北部にも分布している。これらはすべて無気喉頭化音音でもある。

t音が破擦化しているチナ系とツナ系が主流をなして分布している。そして与論島と沖縄中・南部を除く地域では無気喉頭化音が存する。

喜界島では ts$^{\gamma}$unaのように，u母音が変化していない形がみられる。

宮古・八重山では tsïnaのような形が多い。宮古大神島には kïnaがあるが，この方言では中舌母音 ïがかなり u母音寄りに変化したために，それにひかれて ts→ k の変化を起こしたものである。

tが摩擦化したシナ系は伊江島・津堅島・宮城島・黒島などに点在している。

与那国島・多良間島の nna，池間島や沖縄粟国島の n̥n̥a などは語頭音が脱落している。

「手」

t音をとどめるティー系が基本的である。無気喉頭化音は現われない。奄美大島・徳之島では中舌母音をもつ tï 及び tï：が主流をなし，他では ti：である。

口蓋化してtʃになっているのは，沖縄奥武・宮古保良・友利などでみられる。

摩擦化したシー系は沖縄北部や波照間島などにみられる。

「鳥」

語頭音は圧倒的に tである。無気喉頭化音が見られないのは注目してよい。

わずかではあるが沖縄北部の佐手・宇嘉などに suiが見られる。久高島では r̥uiである。

「鳥」の第２音節の「り」が r音をとどめている方言は奄美大島に圧倒的に大く，喜界島と徳之島の一部にも見られる。さらに八重山と宮宮の多良間島に分布している。r音がこのように琉球の北端と南端に分布しているのは注目してよい。おそらく r音の脱落は沖縄本島中・南部からはじまり，その周辺地域へと波及していったであろう。

特殊な語として西表租納にはググ系が，与那国島にはミタ系がある。

「タ行子音の総合図」

イ段とウ段は破擦化している方言が圧倒的に多い。そして北琉球では無気喉頭化音の t$^{\gamma}$，tʃ$^{\gamma}$，ts$^{\gamma}$ などが現われるのに対して，南琉球では与那国島以外ではほとんど現われない。

タ行音については小論「タ行音の構造的推移」を参照されたい。

以上の母音・ハ行音・カ行音・タ行音におけるいくつかの語についての分布層の考察から次のことが明らかになった。

沖縄中・南部の地域は比較的新しい層に変化し，北端の奄美・沖縄北部と南端の宮古・八重山は比較的古い層をとどめている。これは琉球王国時代以来，沖縄中・南部が文化・政治の中心であり，外来の文物の摂取の要地であったこ

Hosei University Repository

とと関係がある。

比較的に古い層

(1) イ段母音とエ段母音の区別。奄美大島では i / ï で区別し，宮古・八重山では ï/i で区別している。

(2) ハ行 p音の残存。

(3) p・k・t・tʃ・ts の無気喉頭化音。

(4) 宮古・八重山の pu→ fu， ku→ fu の変化。

比較的に新しい層

(1) イ段母音とエ段母音の区別の消失。沖縄本島を中心に与論島・沖永良部島・喜界島に及んでいる。

(2) ハ行子音の摩擦音化。 p→ φ→ h，p→ çなど。

(3) 無気喉頭化音の消失。

(4) イ段における kの口蓋化。

(5) 「鳥」の r音の脱落。

参 考 文 献

1934 「国頭方言の音韻」仲宗根政善，『方言』4－10

1976 『琉球方言音韻の研究』中本正智，法政大学出版局

1976 「古代ハ行 p音残存の要因 ── 琉球に分布する p音について ── 」中本正智，『国語学』107

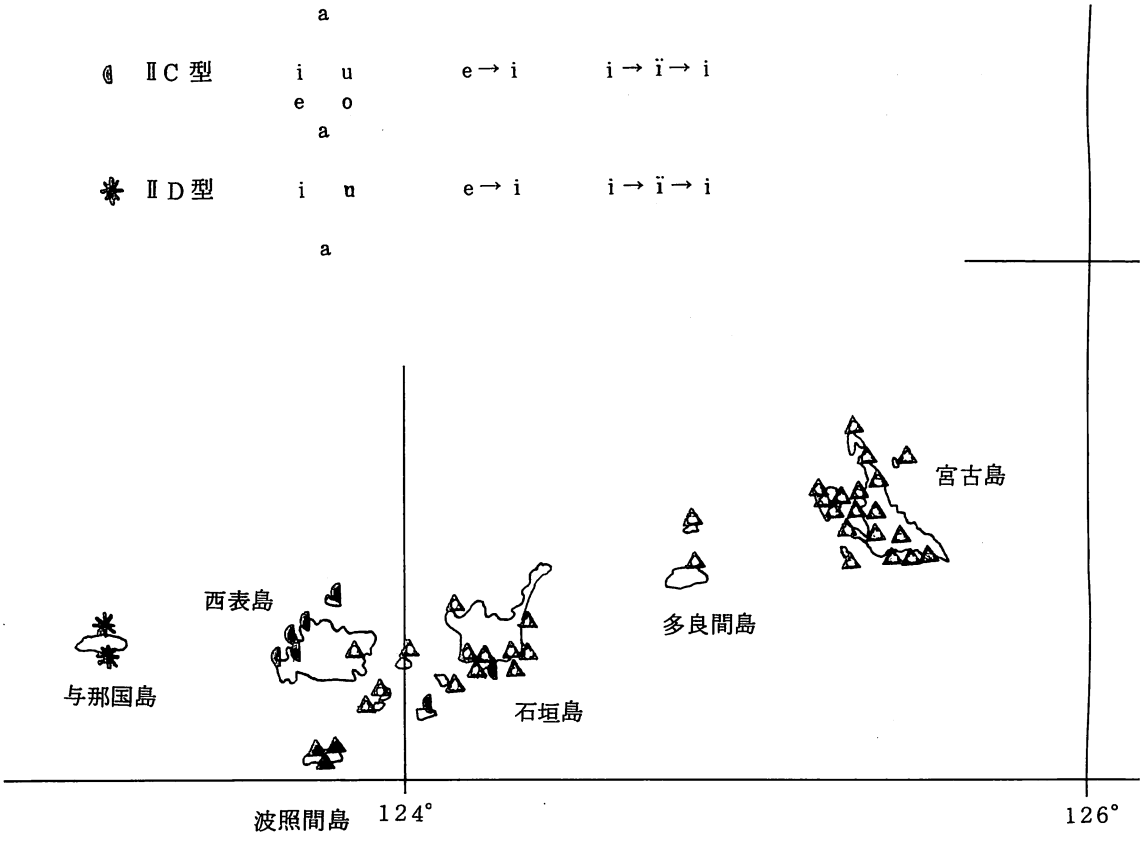
1977 「タ行音の構造的推移」中本正智，『人文学報』117

1980 「南島方言の概説」中本正智，『講座方言学』

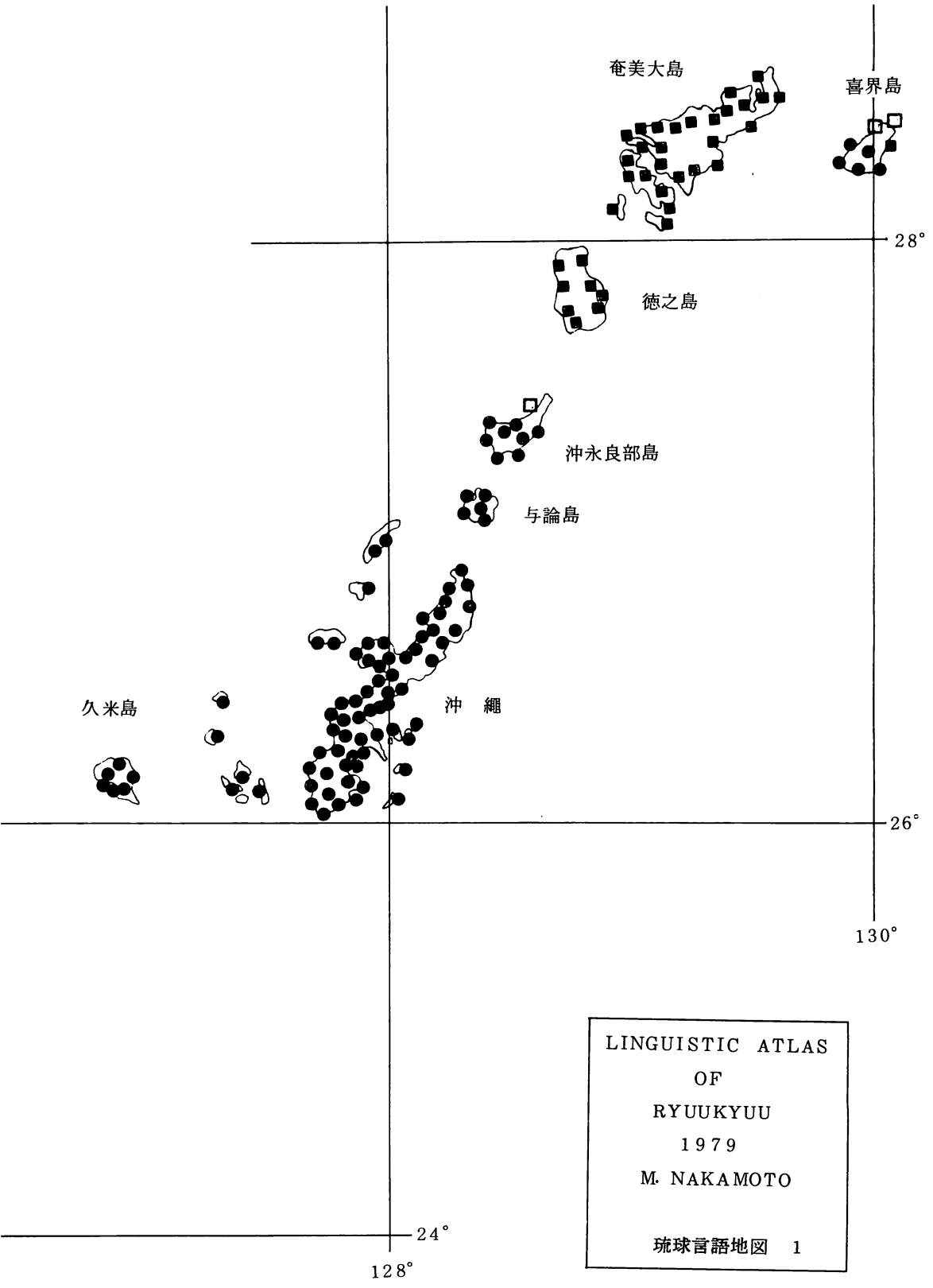
Hosei University Repository

琉球方言の母音体系の分布

	構造	推移型	
■ ⅠA型	i ï u e ë o a	e→ ï	i＝ i
□ ⅠB型	i ï u e o a	e→ ï	i＝ i
● ⅠC型	i u e o a	e→ ï→ i	i＝ i
▲ ⅡA型	i ï u e ë o a	e→ i	i→ ï
△ ⅡB型	i ï u e o a	e→ i	i→ ï
◐ ⅡC型	i u e o a	e→ i	i→ ï→ i
✱ ⅡD型	i u a	e→ i	i→ ï→ i



Hosei University Repository



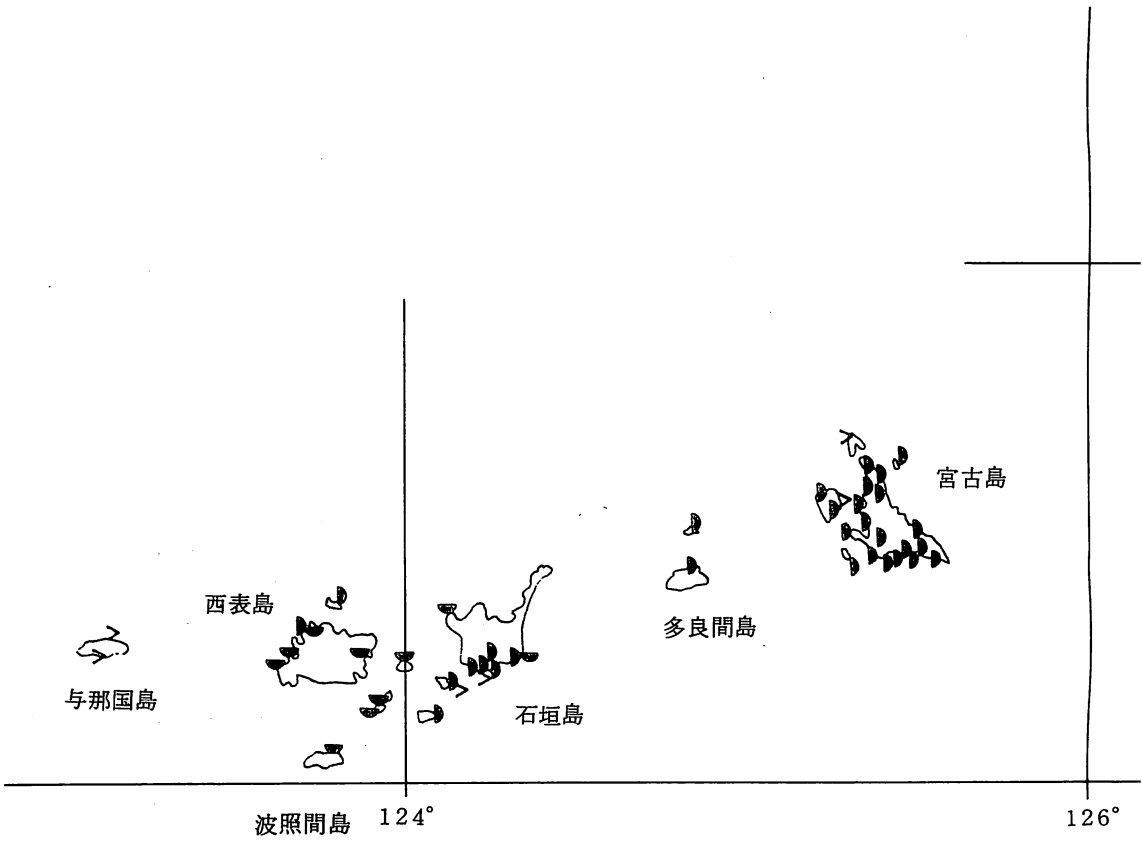
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　1

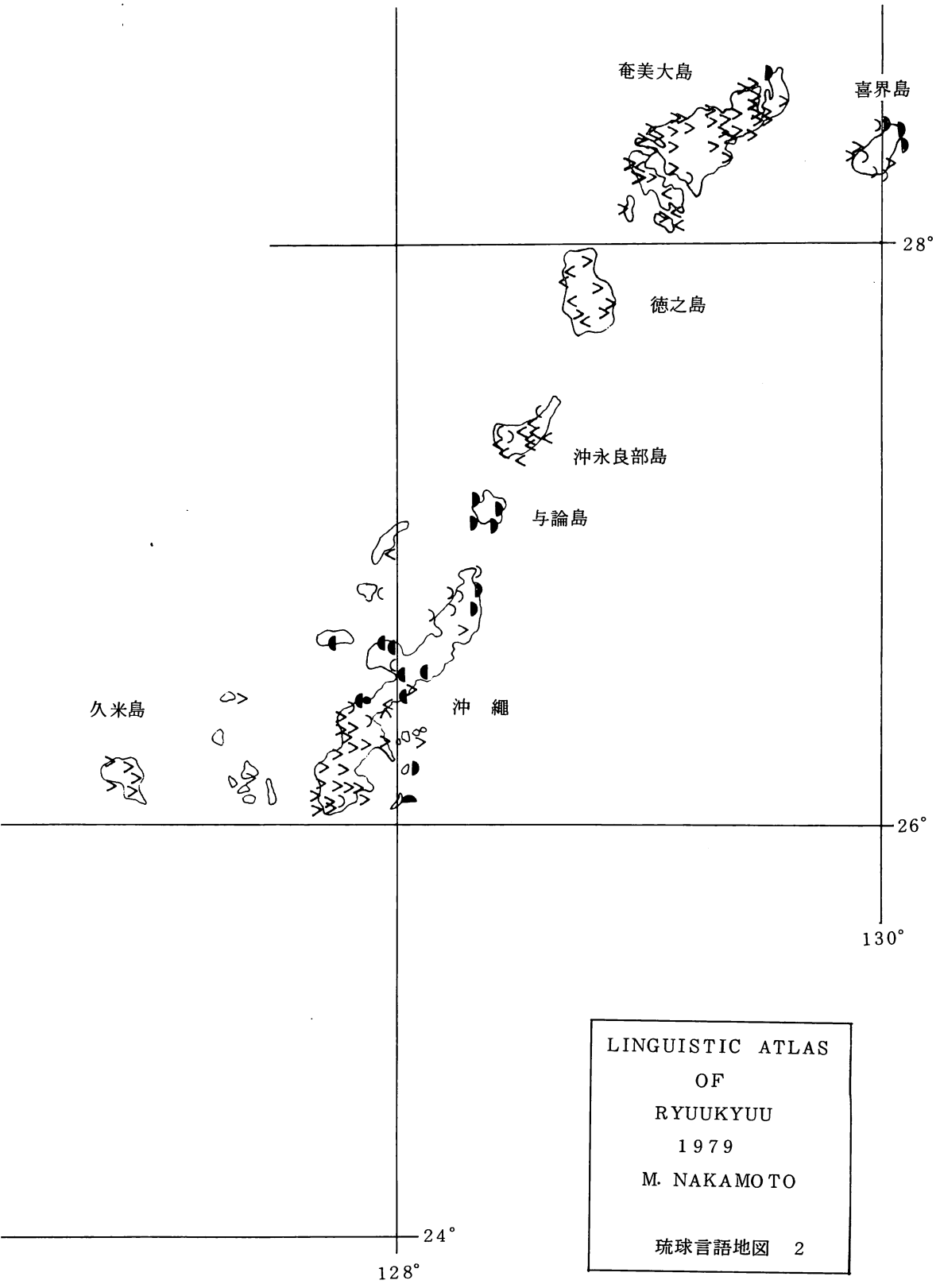
Hosei University Repository

花

パナ系	pana	panaː	paːnaː	pφana	pḁnḁ
ファナ系	φana	φanaː			
ハナ系	hana	hanaː	haːnaː		



Hosei University Repository



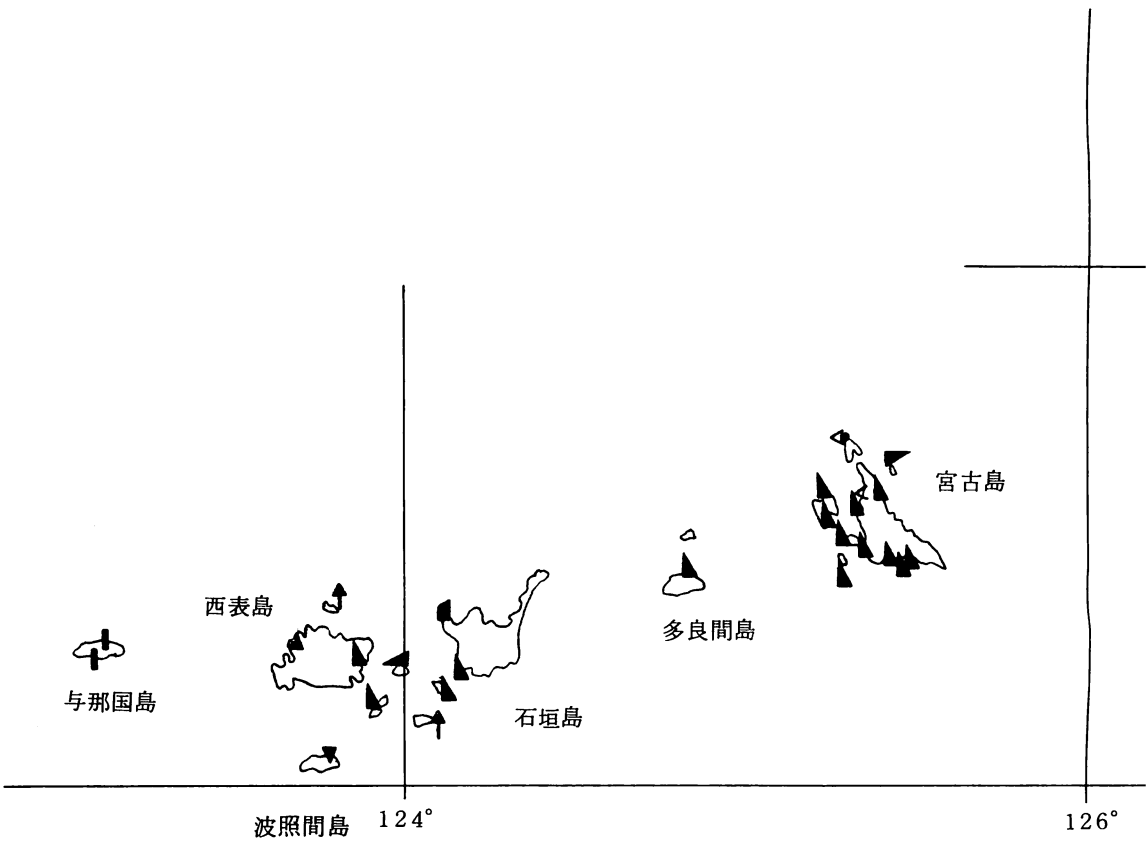
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　2

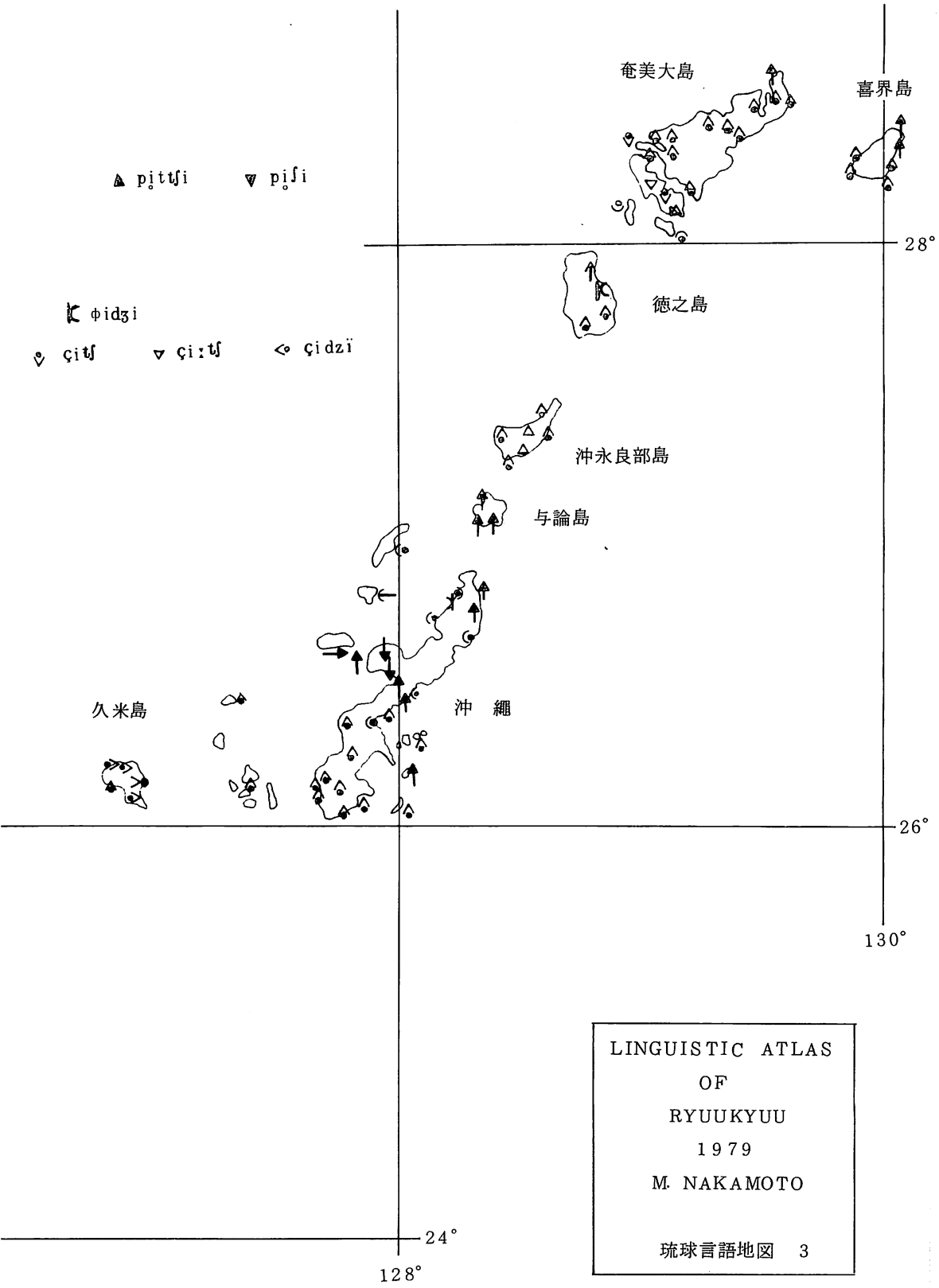
Hosei University Repository

肘

ピジ系	pidʒi	pʔidʒi(:)			
	pidzï	pitsï	pidzu	pikï	pintsï̥
ティジ系	tidʒi				
チディンカ系	ʧʔidiŋka				
ヘッ系	xët	xï:ʧ			
フィジ系	ɸidʒi	ɸidʒigenna	ɸidʒige:	ɸirige:	
ヒジ系	çidʒi	çidʒige:	çidʒige:na	çidʒi:	
シジ系	sïdzï				



Hosei University Repository



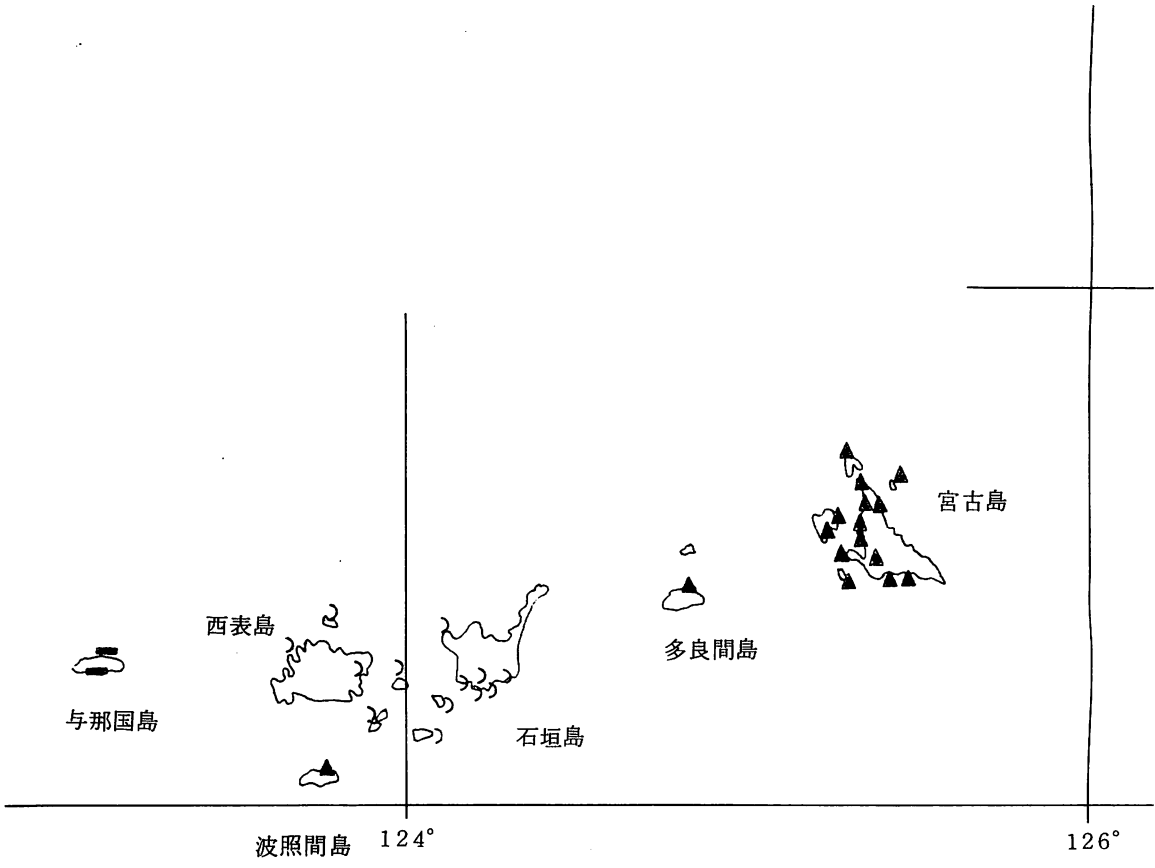
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　3

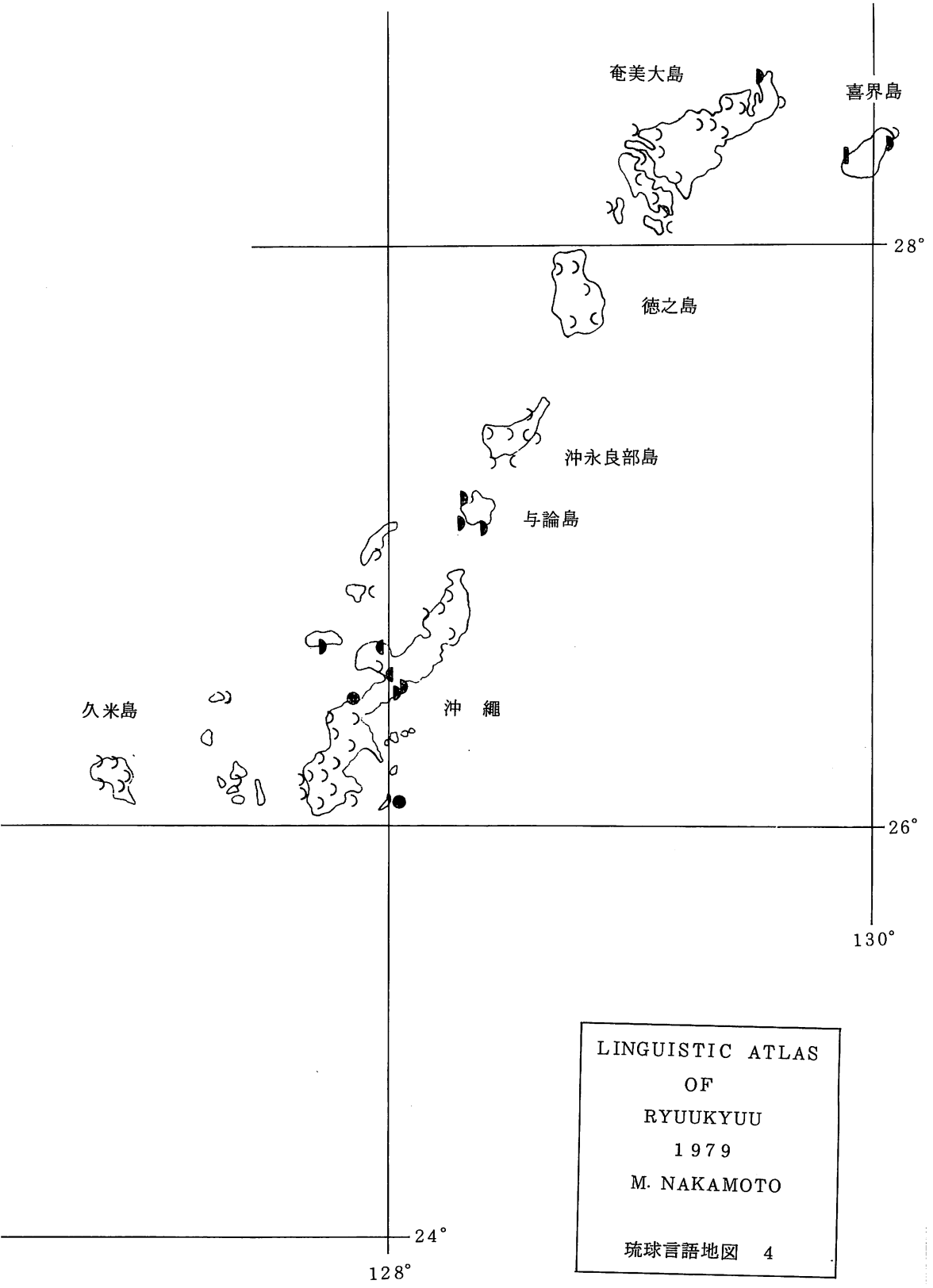
Hosei University Repository

蓋

プタ系	pʔuta	puta	puta:
フタ系	ɸuta	ɸuta:	
	futa		
タ系	tʔa	tʔa:	



Hosei University Repository



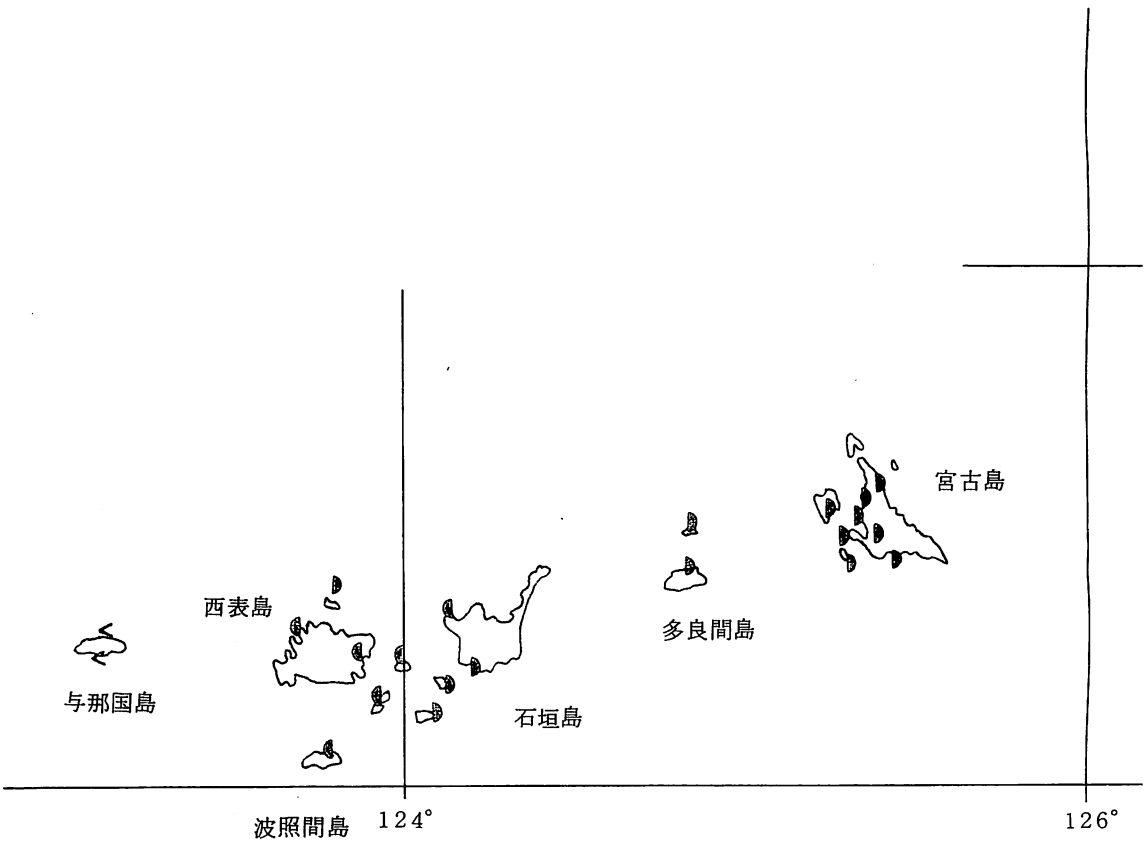
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　4

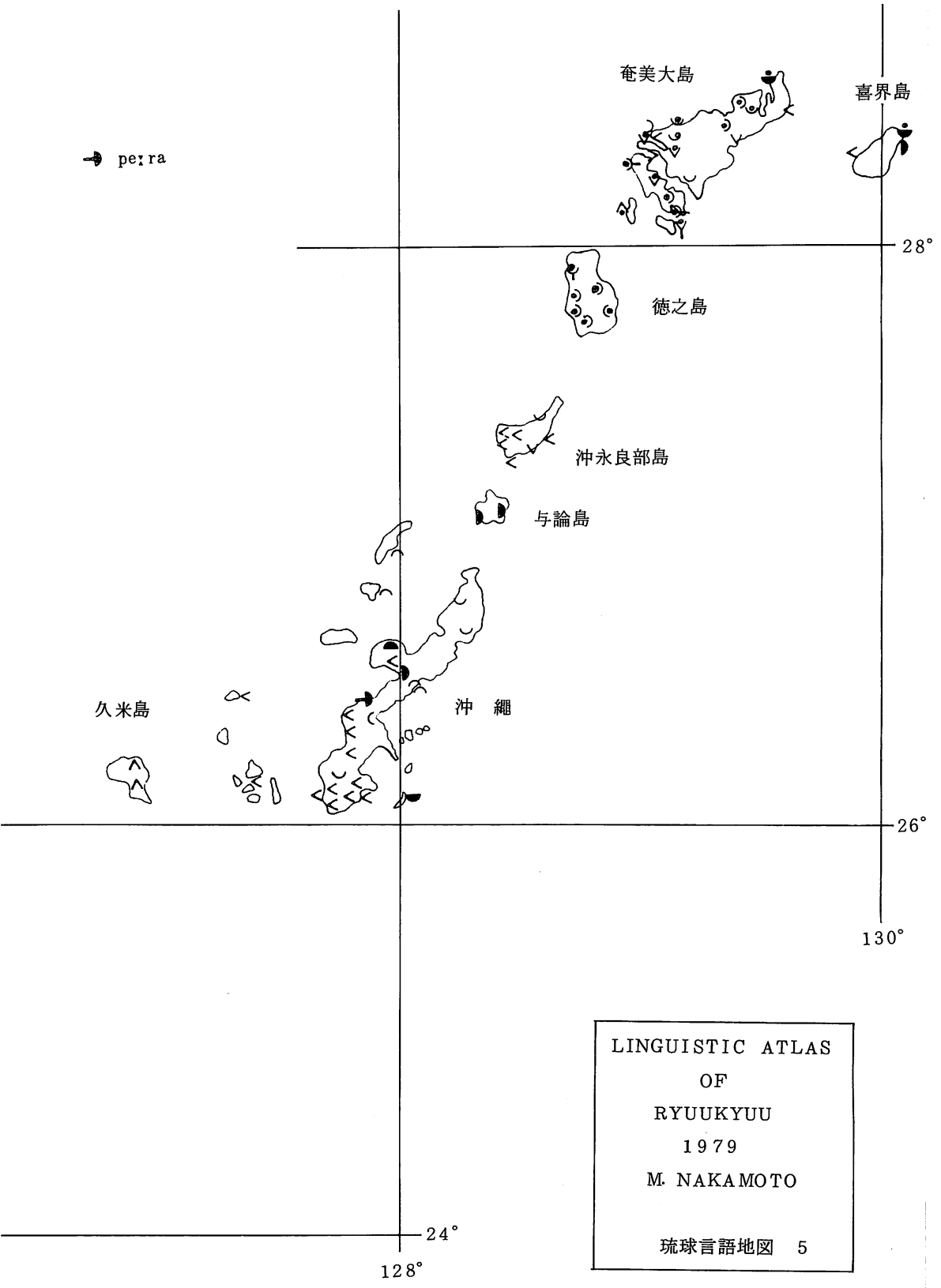
Hosei University Repository

鰤（へら）

ペラ系	pïra	pira	pira:	pi̥ra	pφira
フェラ系	φëra	φïra	φïra:	φï:ra	φuïda
	φira	φira:	φi:ra	φura	φera
ヘラ系	xïra	xïra:	hëra		
	çira	çira:	he:ra	hera	



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　5

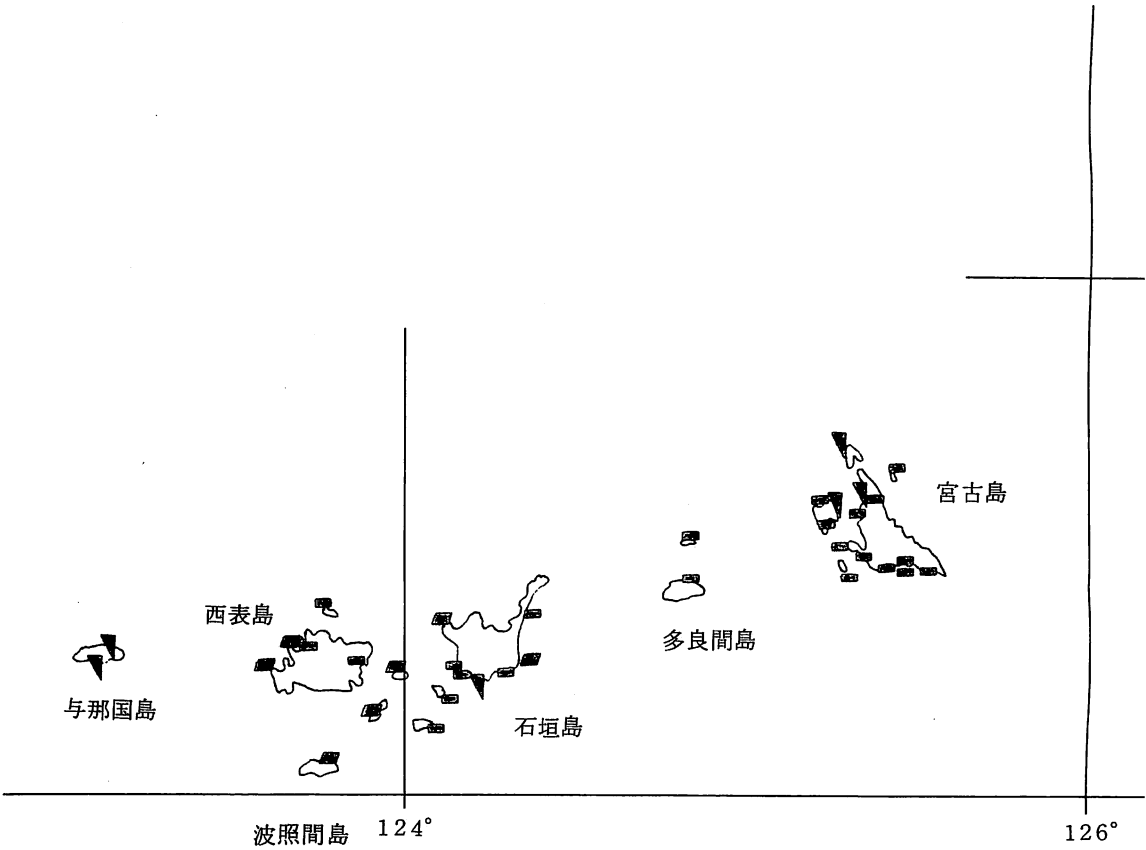
Hosei University Repository

骨

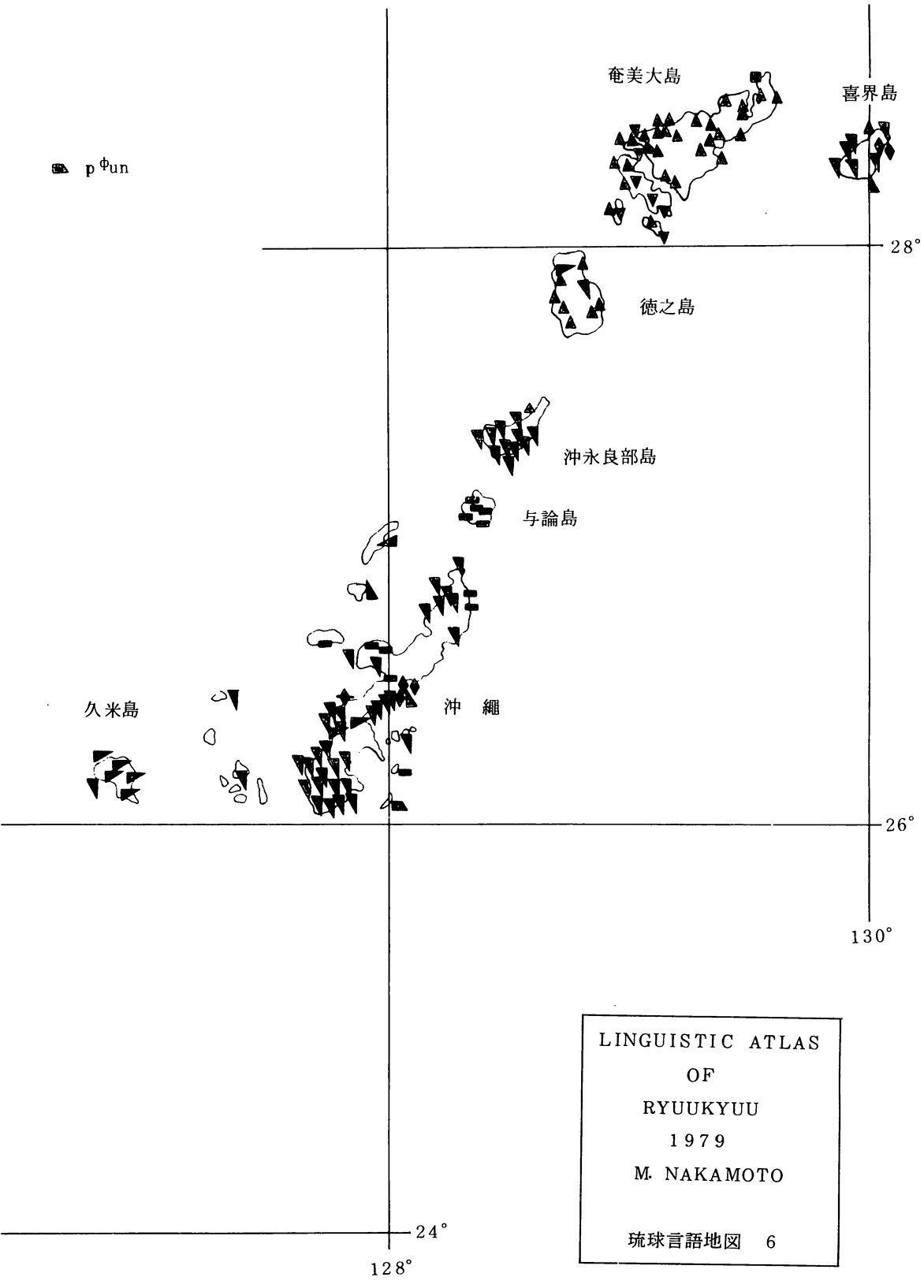
プニ系 puni̇ puni puni: pu:ni pu̥ni

フニ系 φuni̇ Φuni̇: φuni φuni: φu:ni(:)

φu:ni: φuni



Hosei University Repository



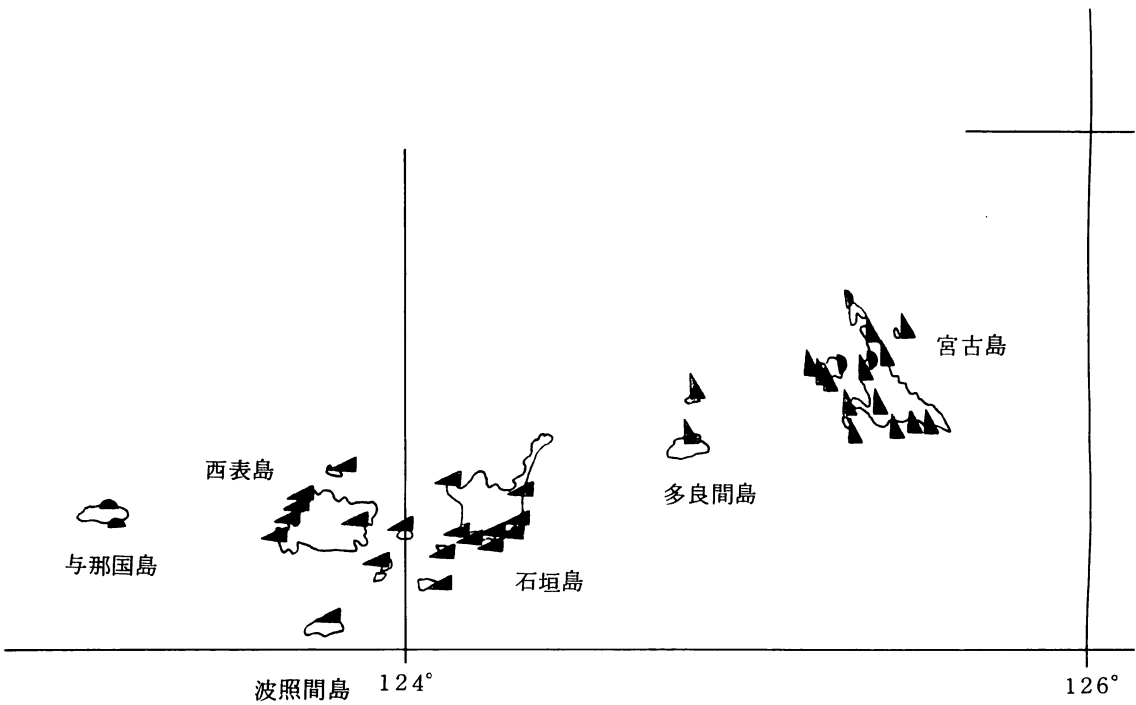
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　6

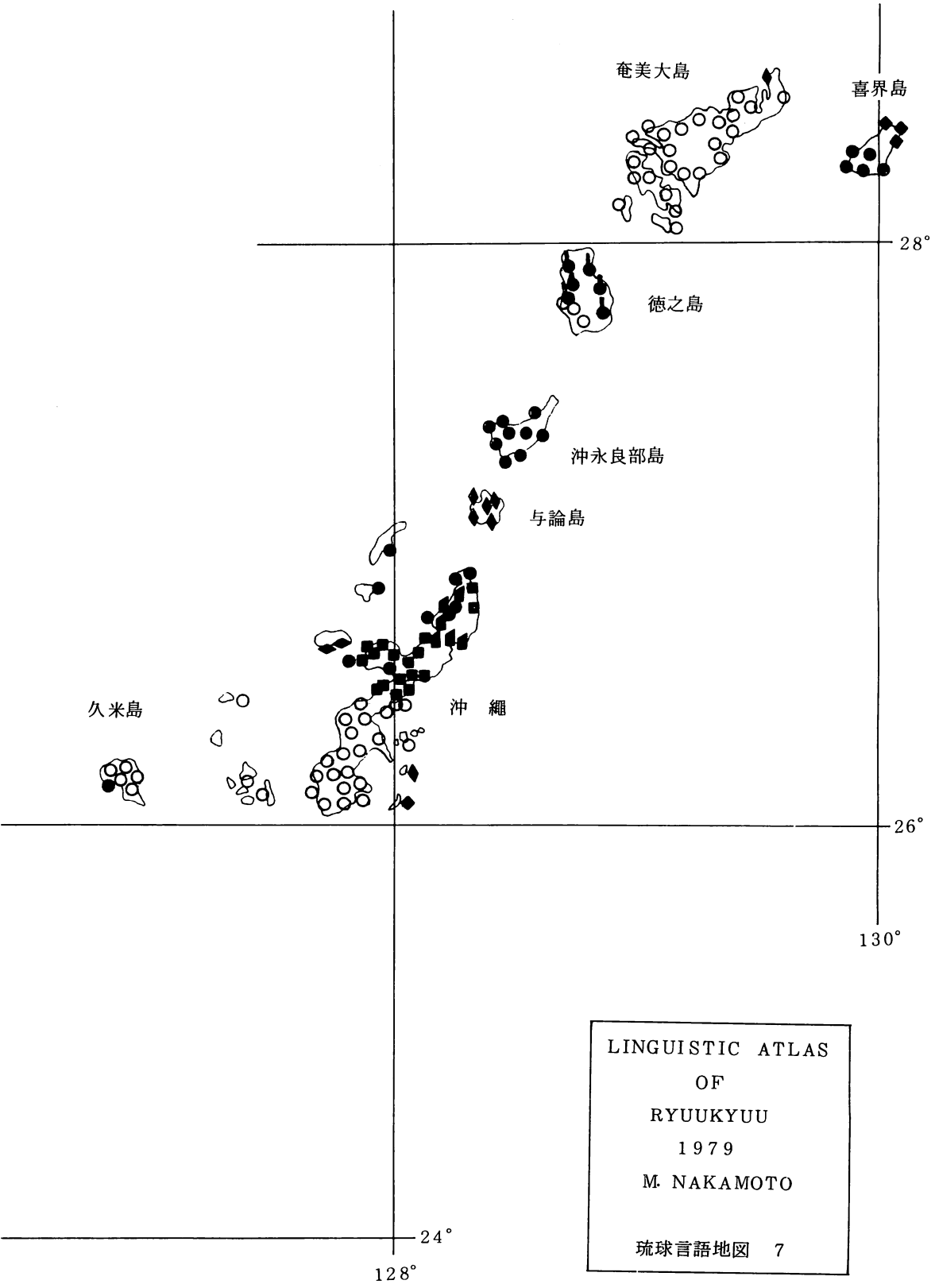
Hosei University Repository

ハ行子音の総合図

	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6		A 7	B 8	B 9	B 10	B 11
ア段	p	pɸ	p	p	ɸ	ɸ h	ɸ h	ɸ h	p	h	p	h
イ段	pʔ	pʔ	p	t	pʔ	ɸ ç	ɸ ç	ʃ s	pˢ	ç	pˢ	tsʔ
ウ段	pʔ	pʔ	p	p	ɸ	ɸ	ɸ	ɸ	f	f	ɸ	ɸ
エ段	p	pɸ	p	p	pʔ	ɸ h	ɸ h	ɸ h	p	h	p	h
オ段	p	pɸ	p	p	ɸ	ɸ h	ɸ h	ɸ h	p	h	p	h
						(カ行h)	(カ行k)					



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　7

Hosei University Repository

風

カゼ系

kade　kade:　kadï　kadi

kadʒe　kadʒe:　kadze　kadze:

kadzë　kadzï　kadzï:

kadʒi　kadʒi:　katʃi　kandʒi

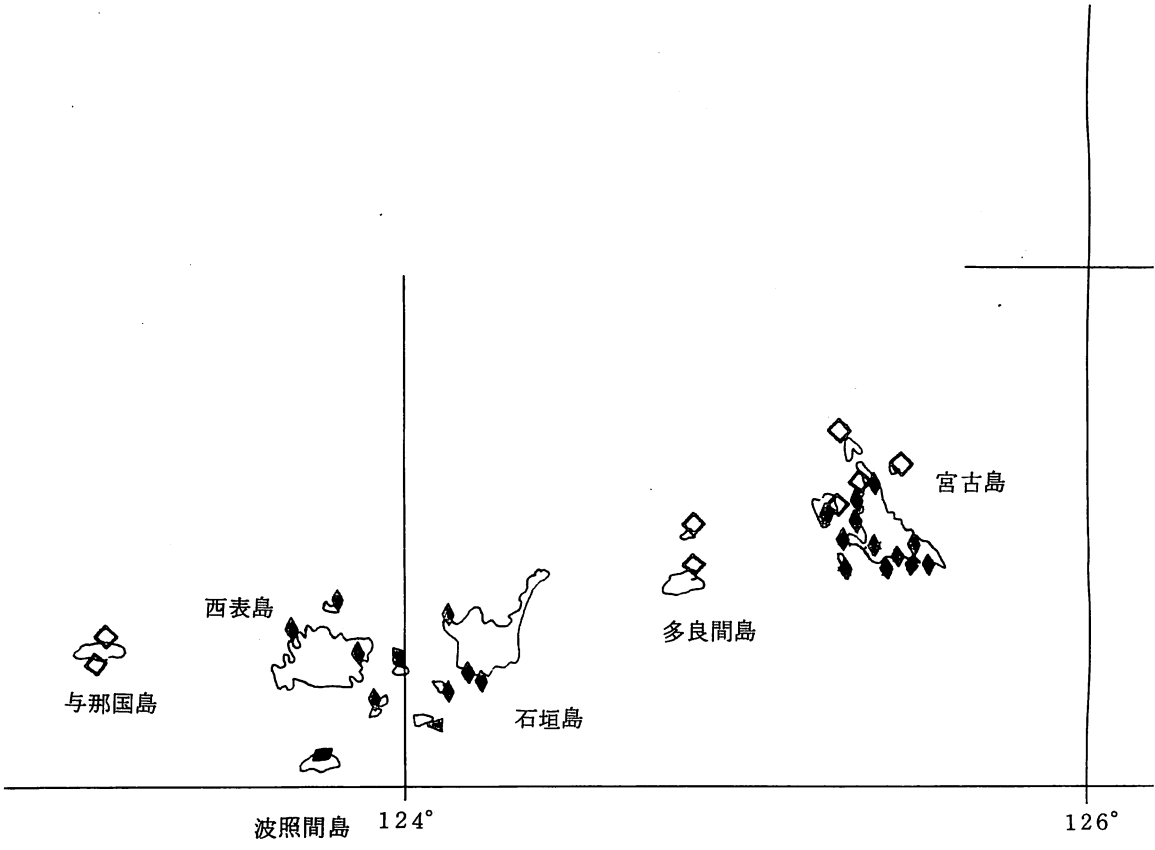
ハゼ系

hadi　hari

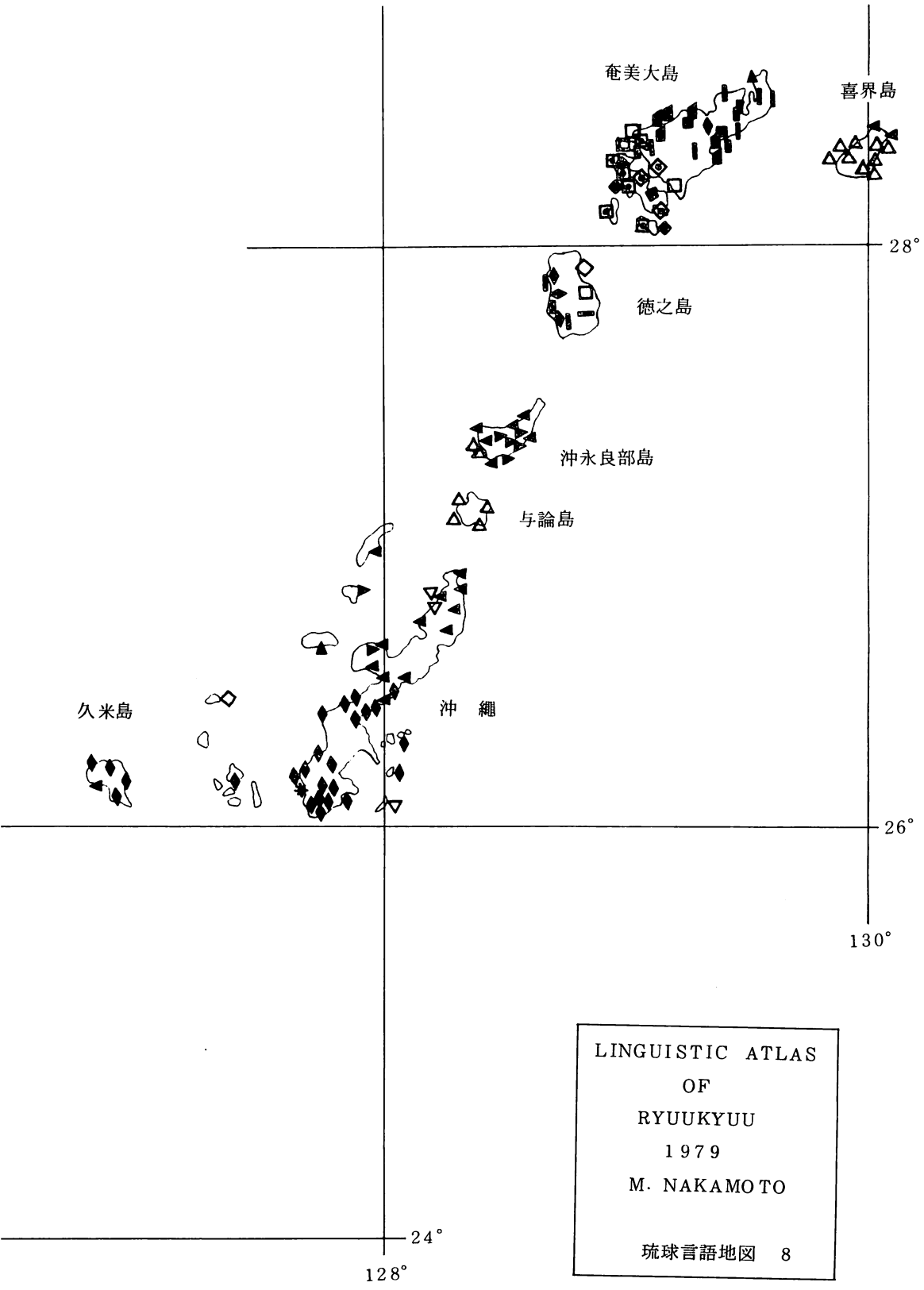
hadzï　hadʒi　hadʒi:　hazi

イキ系

ʔiki



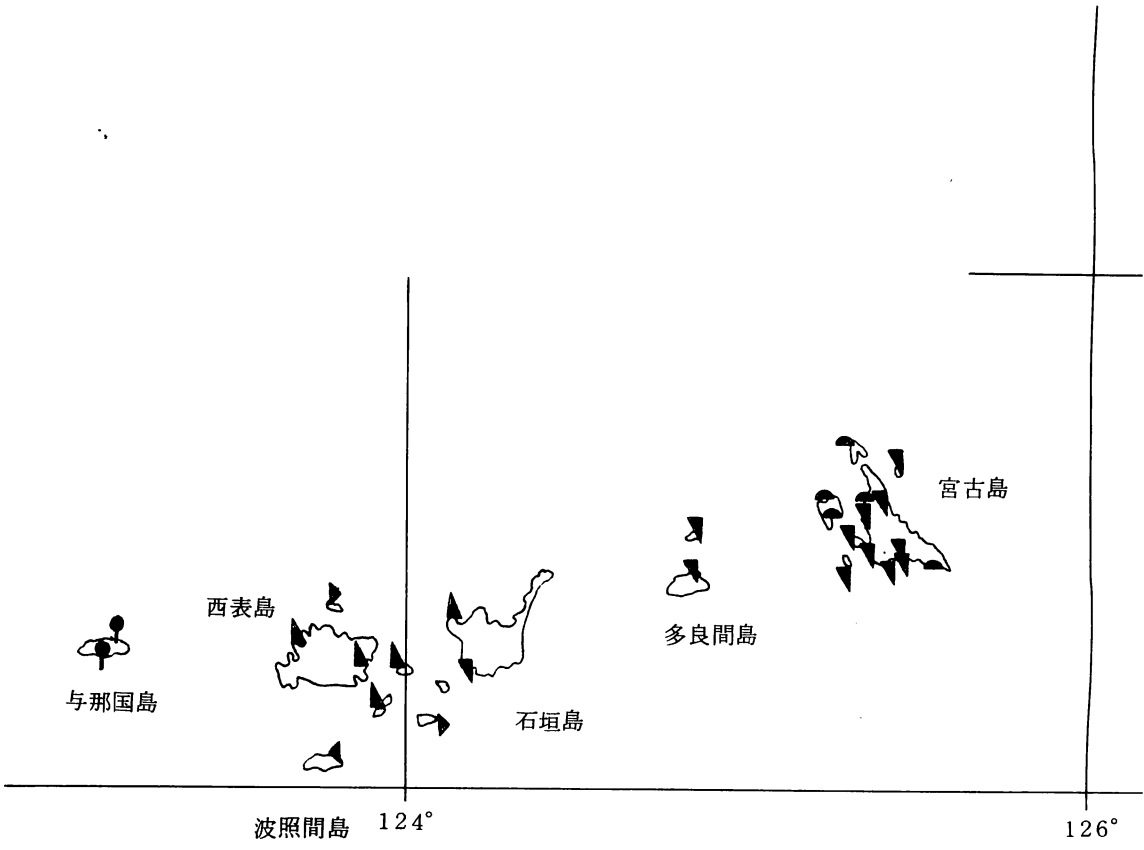
Hosei University Repository



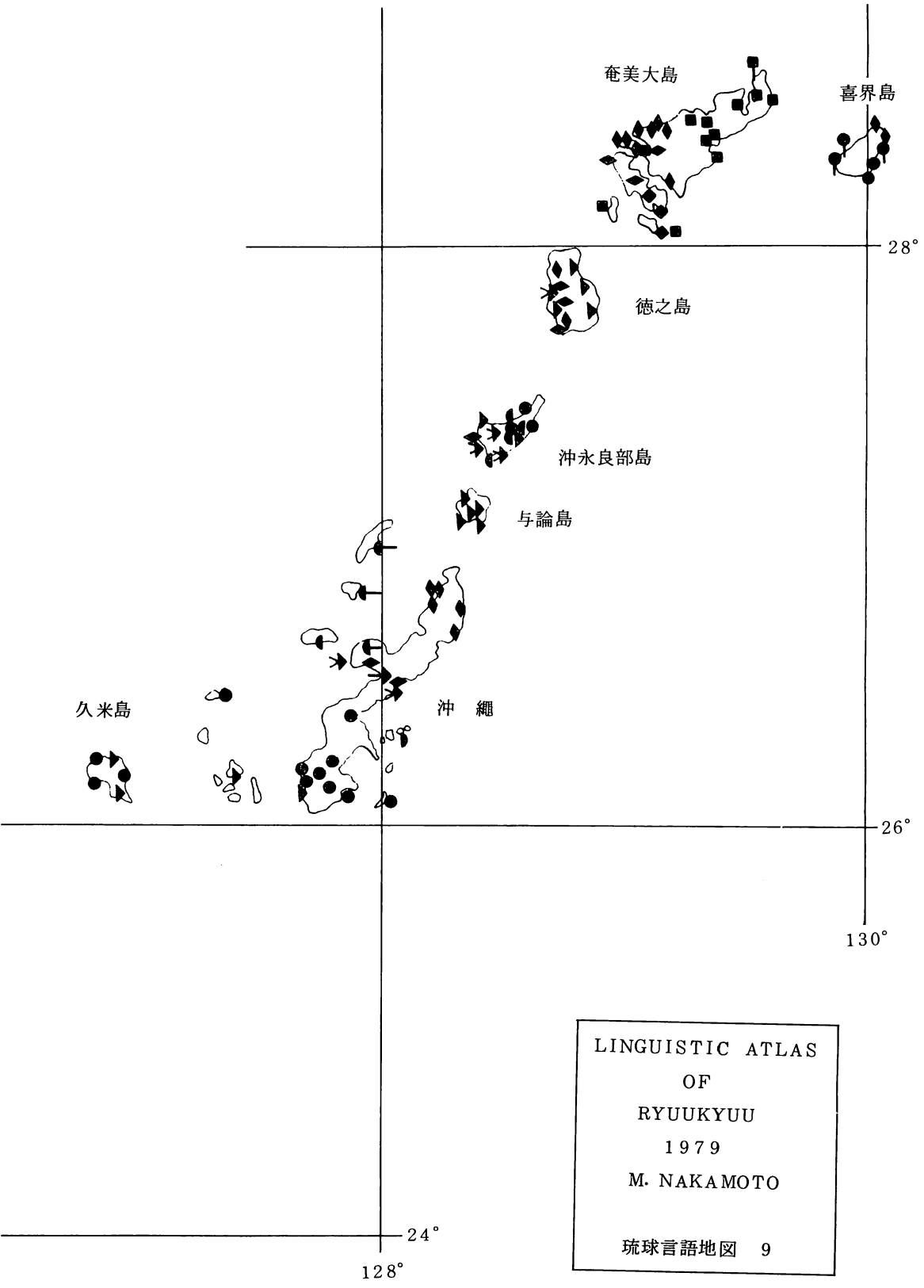
Hosei University Repository

肝

キモ系	kʔimo	kʔimoː	kʔjoː̃
	kʔimu	kʔimuː	
	kimu	kimuː	kinnuː
	kïmu	kïmu	kïmu
チム系	tʃʔimu	tʃʔimuː	
	tʃimu	tʃimuː	
	tsïmu		
シム系	ʃimu		



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　9

Hosei University Repository

傷

キズ系 ■ kʔidï ◆ kʔiri ■ kʔidu ◆ tʃʔidu ◆ tʃidu

■ kʔidzï ■ kʔïdzï ■ kʔidzu ■ kʔidʒi ■ kʔi(ː)t

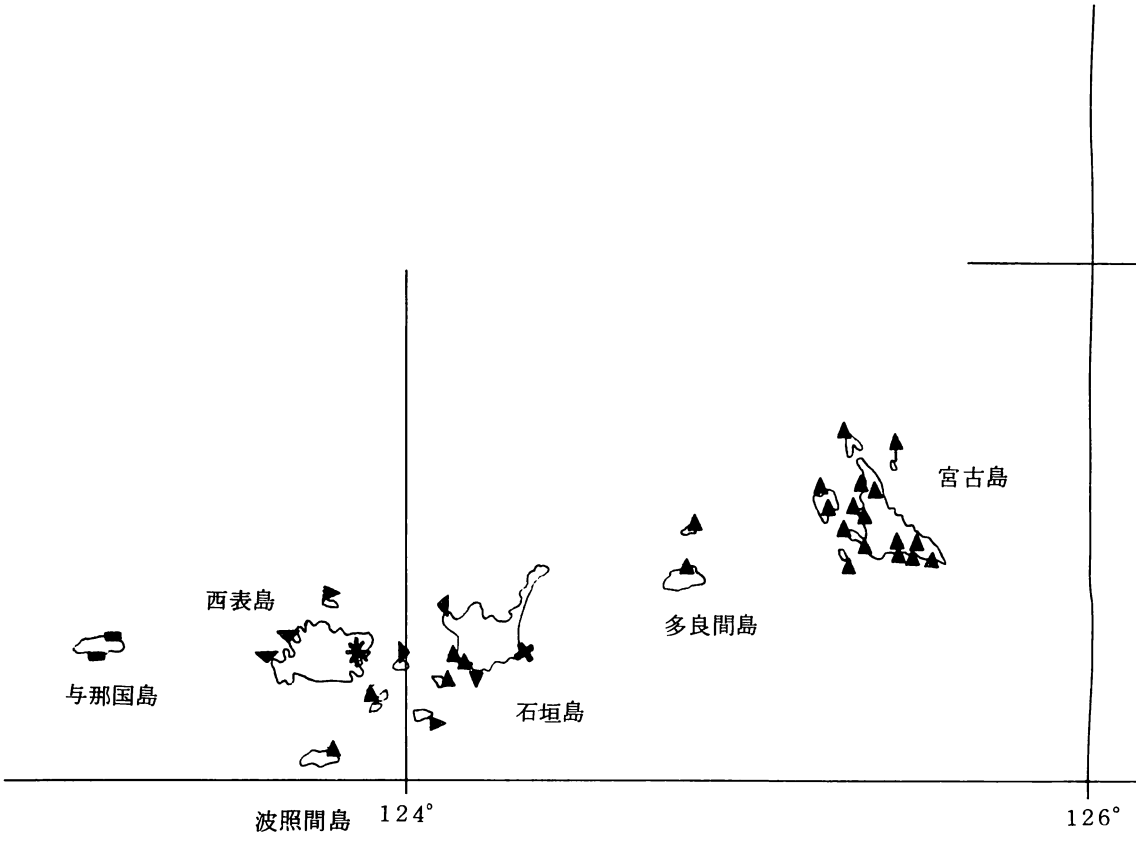
■ kidi

▲ kidzï ▼ kidzu, kidʒu ▶ kidʒi ◀ kidʒiː ◢ kidzi

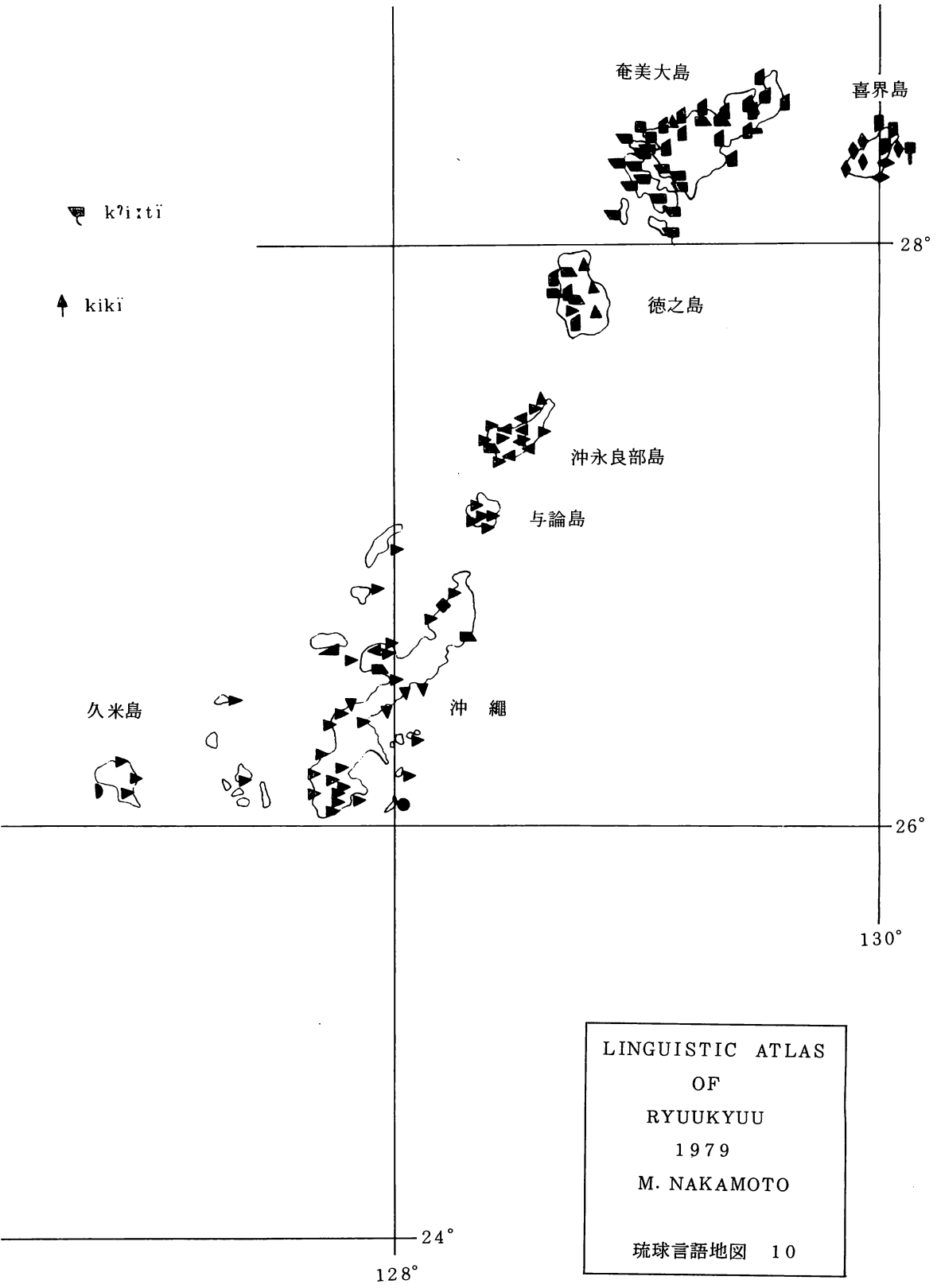
◀ kitsï ▶ kintsï ▼ kitʃi̥

ヒズ系 ● çiri ◗ çidʒi

その他 ✖ pi̥tsuru ✱ kiriɸutsï



Hosei University Repository



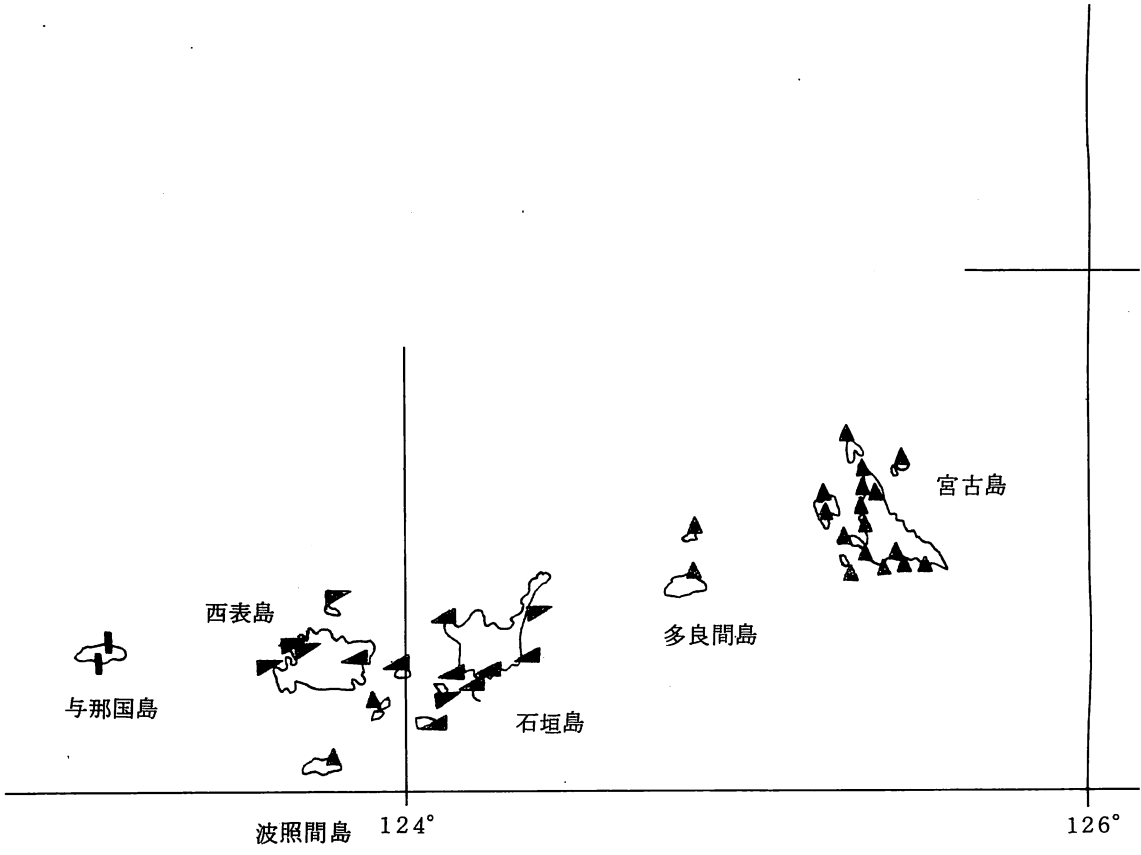
Hosei University Repository

口

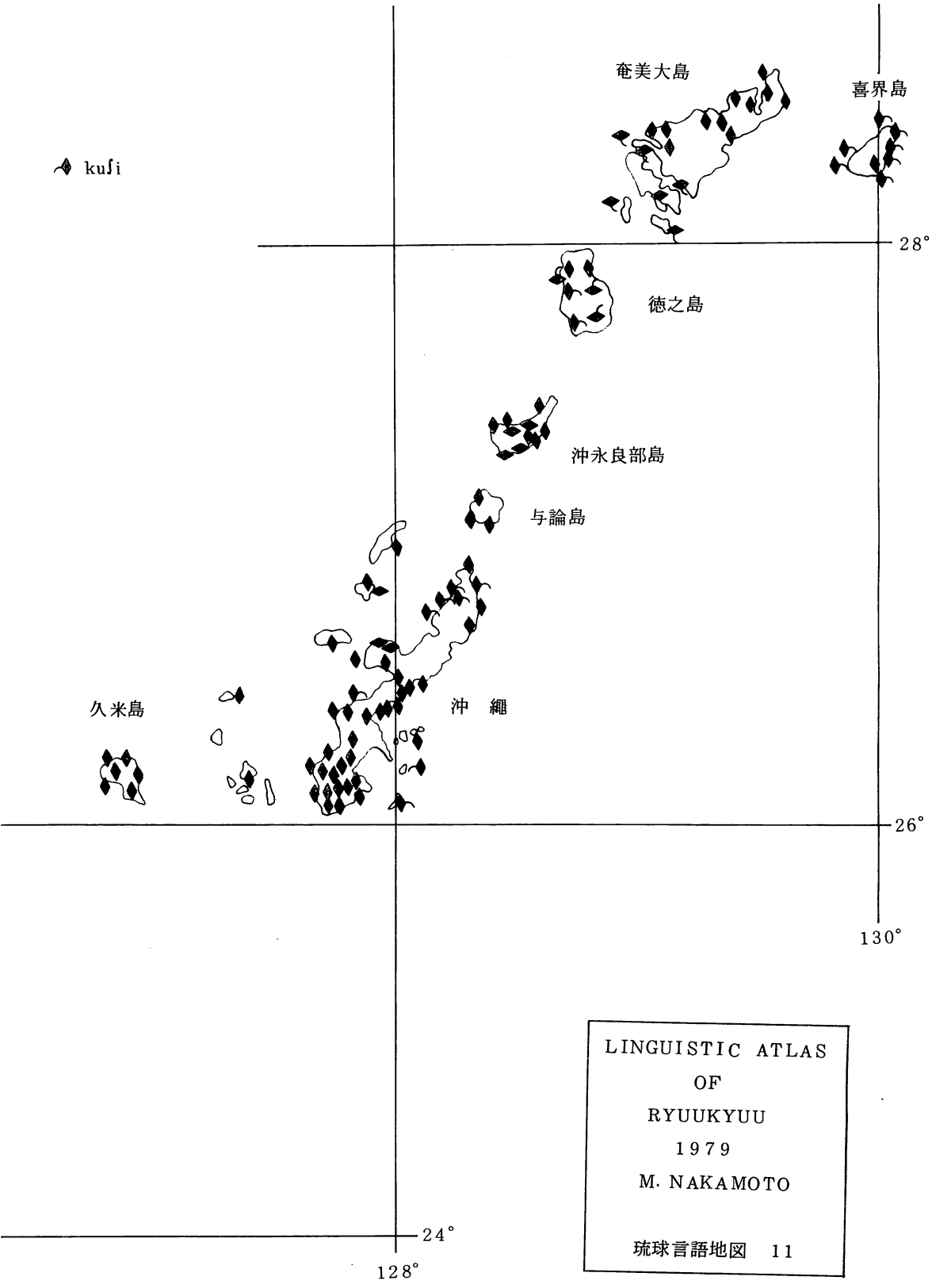
クチ系 kutʃi kutʃiː kʔutʃi kuʰtʃ, kʔutʃ kutsï

フチ系 futsï fukï ɸutsï ɸutʃi

ティ系 tʔiː, tʔibuni



Hosei University Repository



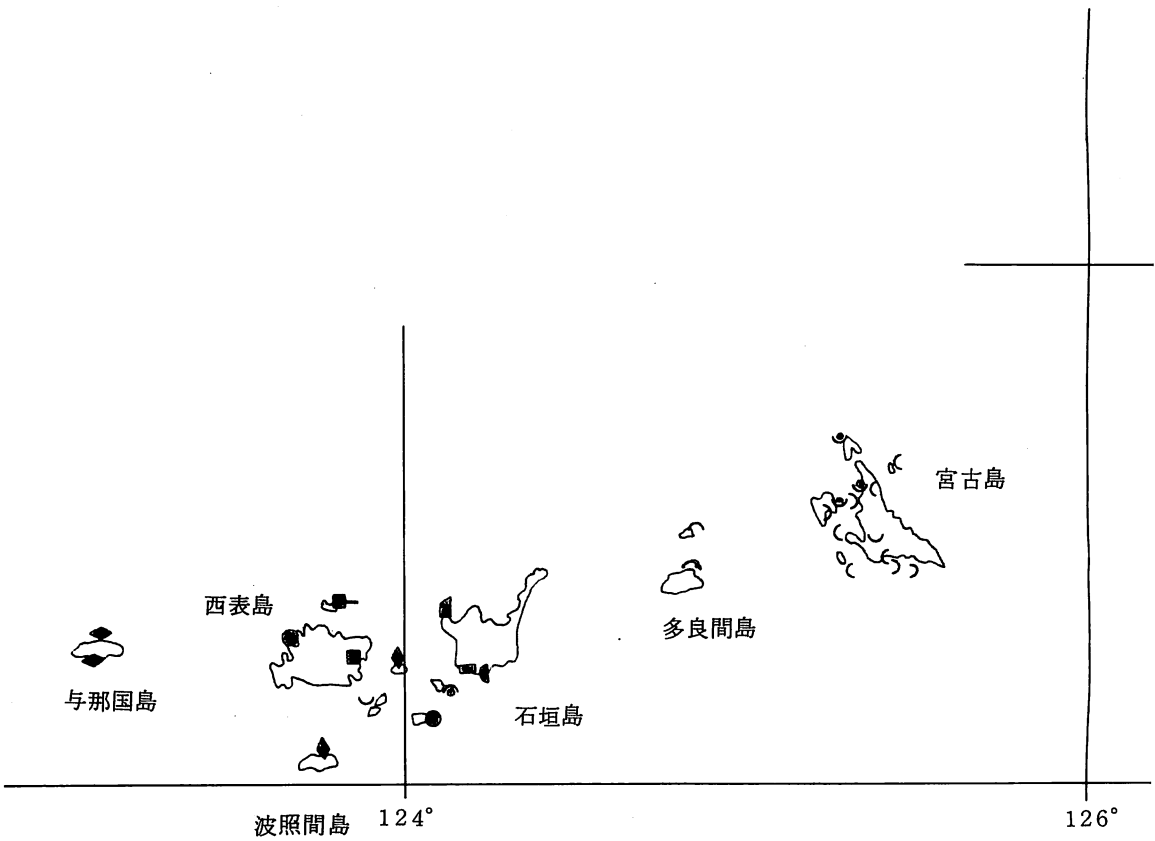
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　11

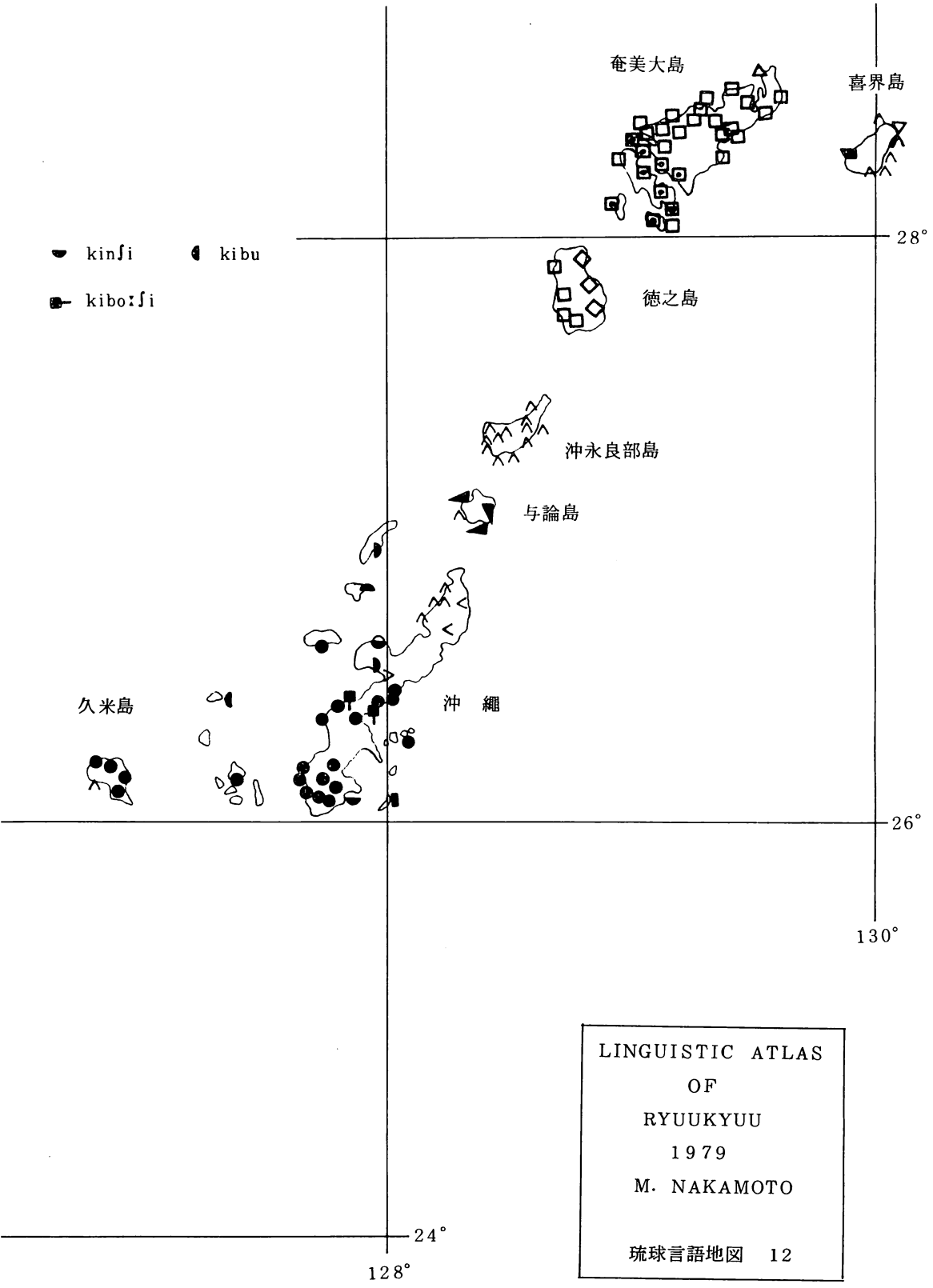
Hosei University Repository

煙

ケムリ系	kimurï	kimuri		
ケブシ系	kïbuʃi	kïbu(ː)ʃ	kïbusï	
	kibuʃi	kibuːʃi	kibui	kiwuʃi
	kʔibuʃa	kibusï	kibusuː	kiboʃi
	kipusï	kibuntʃi		
	kifusï	kiffu	kifu	kivsï
	kjuːsï	kjuːʃi		
	xïbuʃi	çïbuʃi		
	çibuʃi	çiːbuʃi	haoːʃi	
ケンブシ系	ʃimbuʃi	çimbuʃi		



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　12

Hosei University Repository

これ

クリ系 kurï kurɪ: kuri kuri̥

kur, kuːr kun

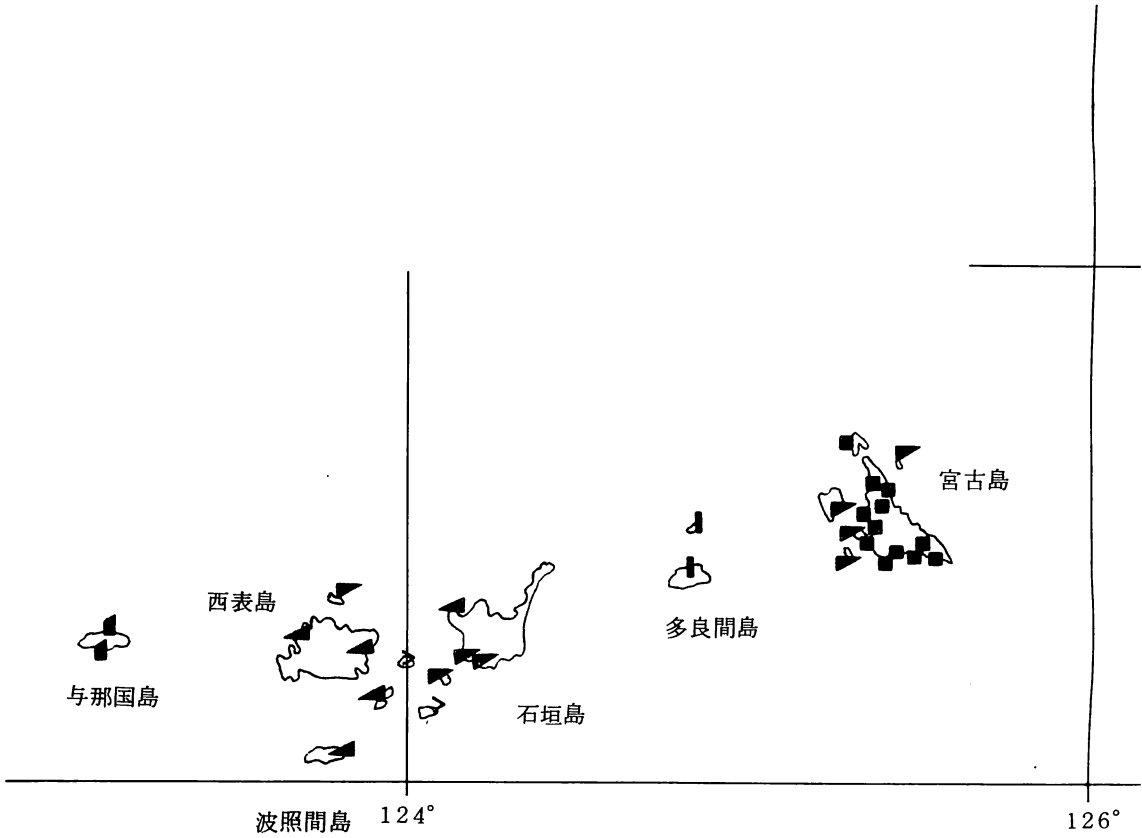
kul

kui

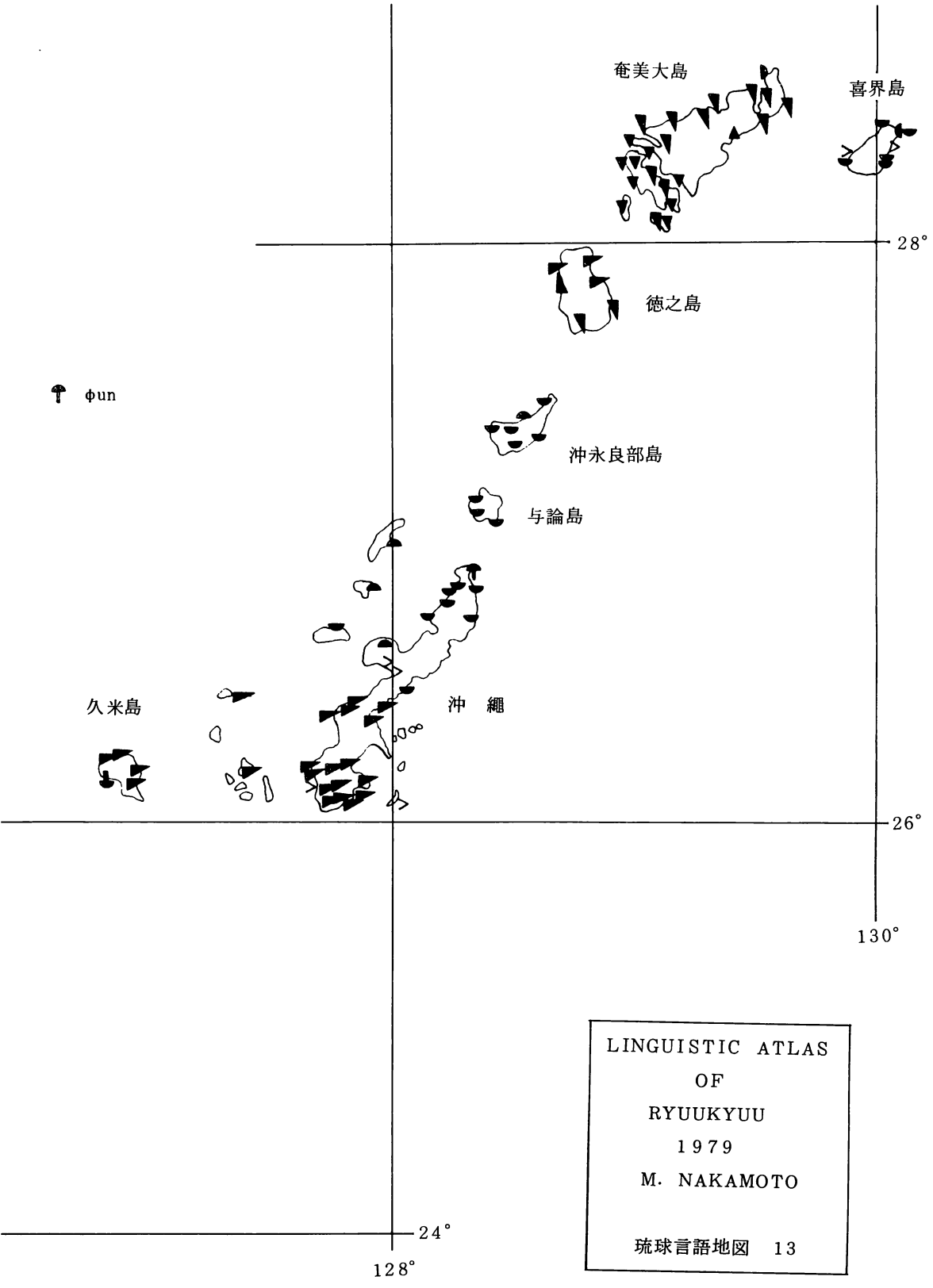
kuː

フリ系 ɸurï ɸurɪ ɸuri ɸuriː ɸui

ウリ系 > ʔuri.



Hosei University Repository



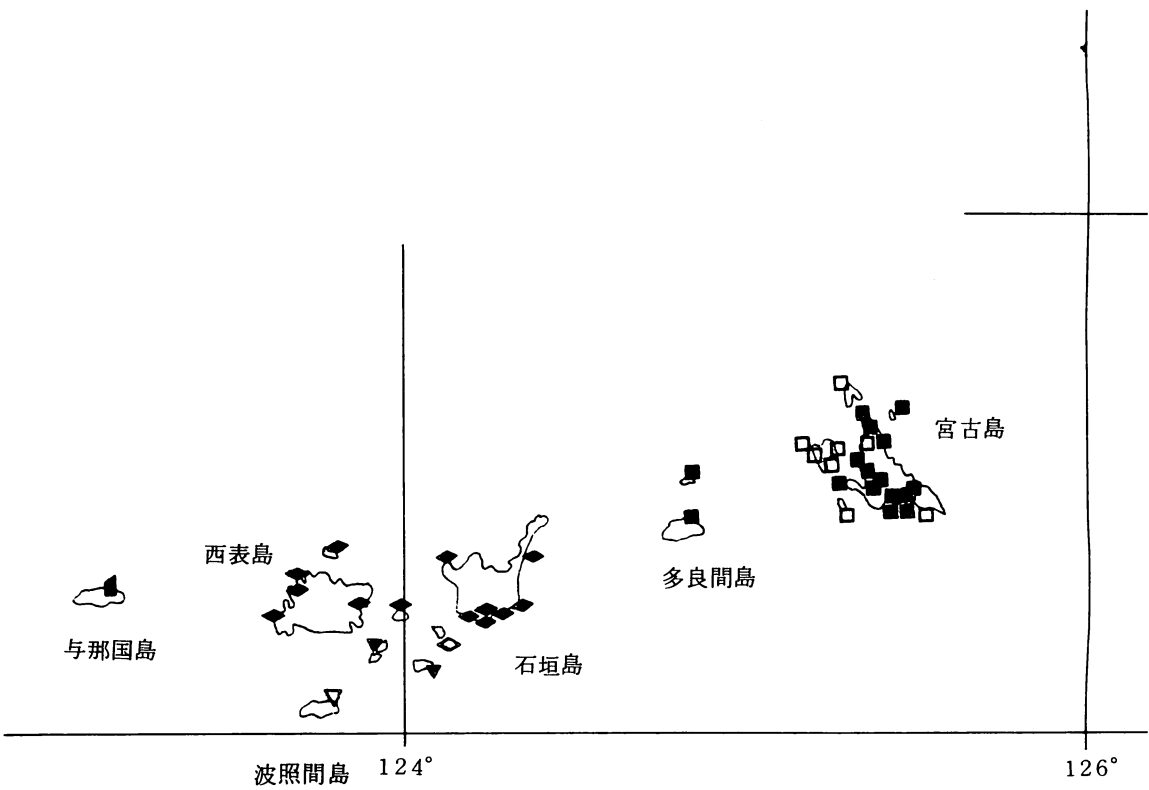
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　13

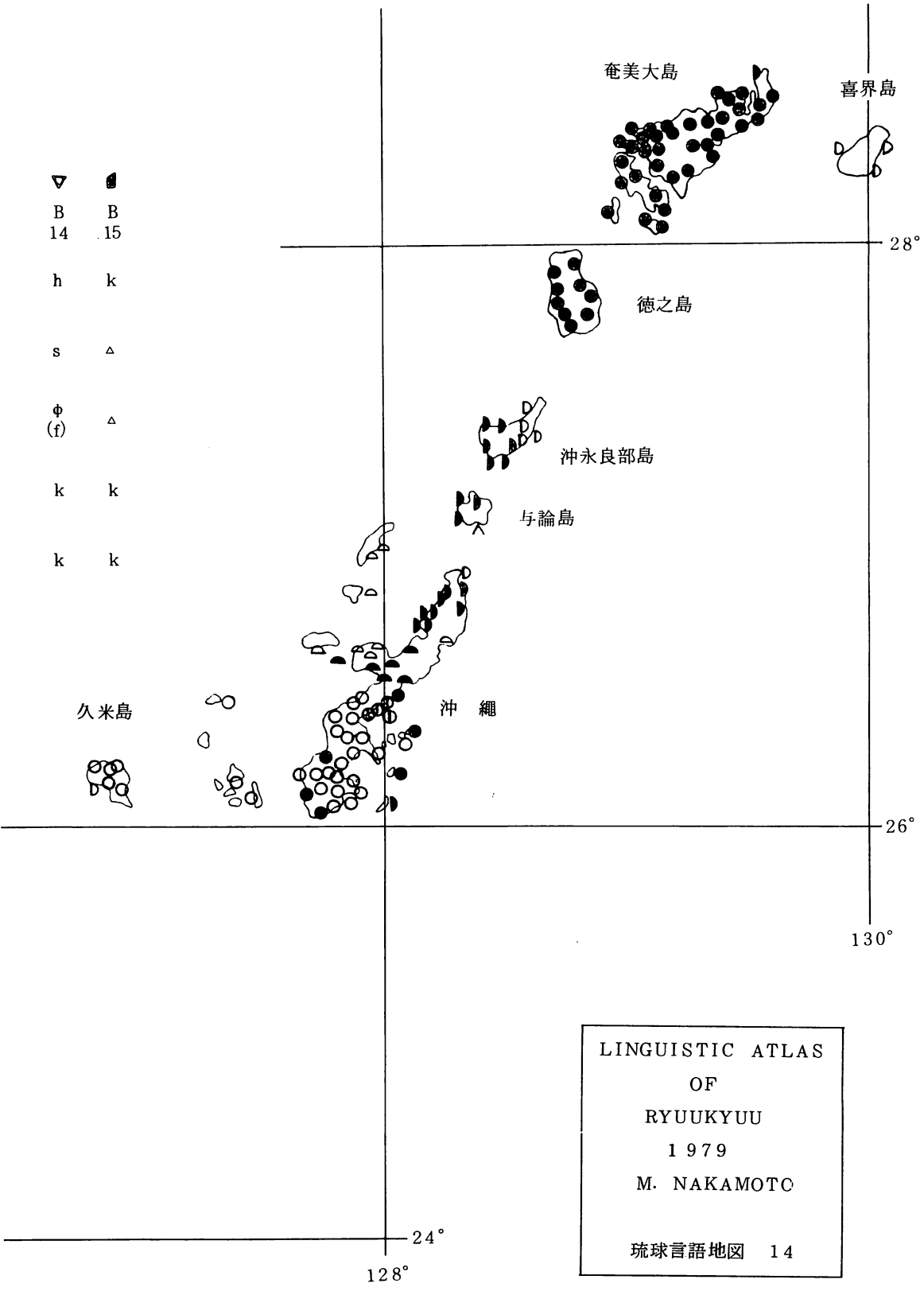
Hosei University Repository

カ行子音の総合図

	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	B 9	B 10	B 11	B 12	B 13
ア段	k	k	k	h	h	h	h	h	k	k	k	k	h
イ段	k kʔ	tʃ tʃʔ	s ʃ	k kʔ	tʃ tʃʔ	k kʔ	tʃ tʃʔ	k kʔ	k	ts	k	s	k
ウ段	k kʔ	k kʔ	k	k kʔ	k kʔ	k kʔ	k kʔ	k kʔ	f	f	ɸ	ɸ	ɸ
エ段	k	k	k	k	k	h	h	s	k	k	k	k	k
オ段	k	k	k	h	h	h	h	h	k	k	k	k	k



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1 9 7 9
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　14

Hosei University Repository

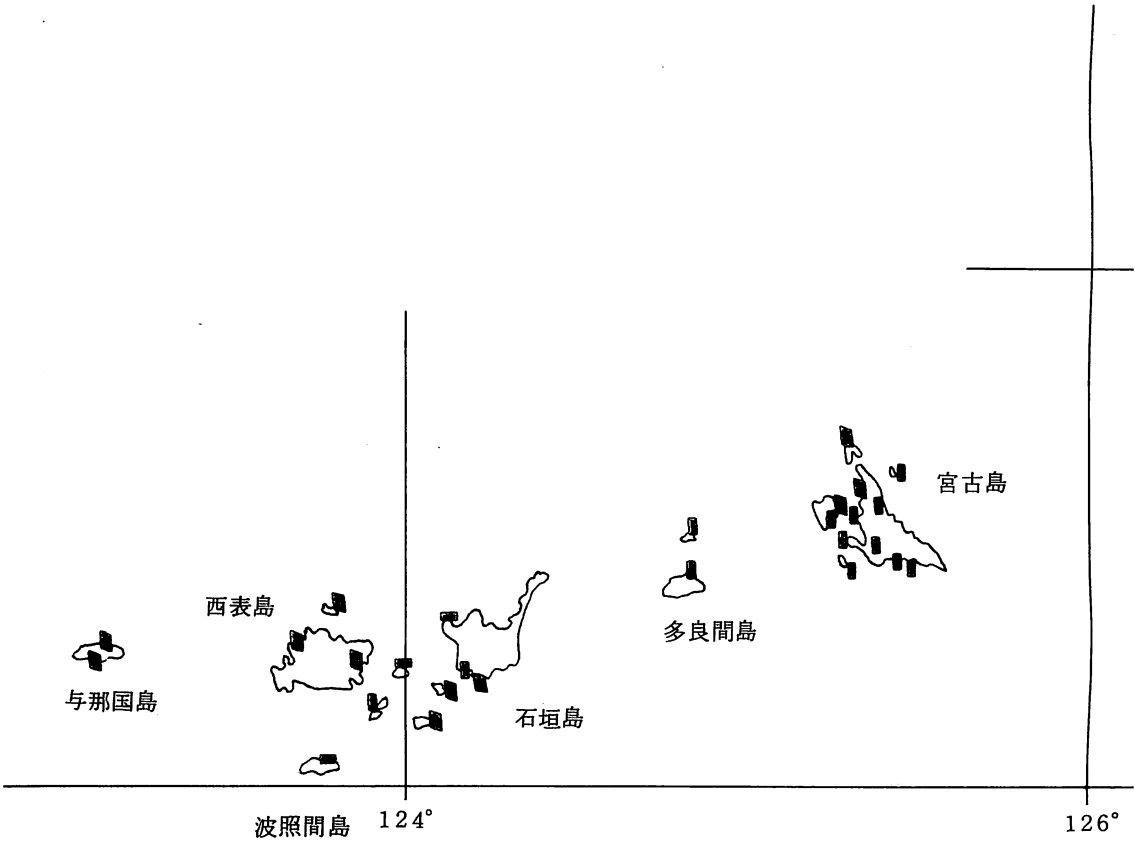
旅

タビ系　tabi　tabiː　ta(ː)p

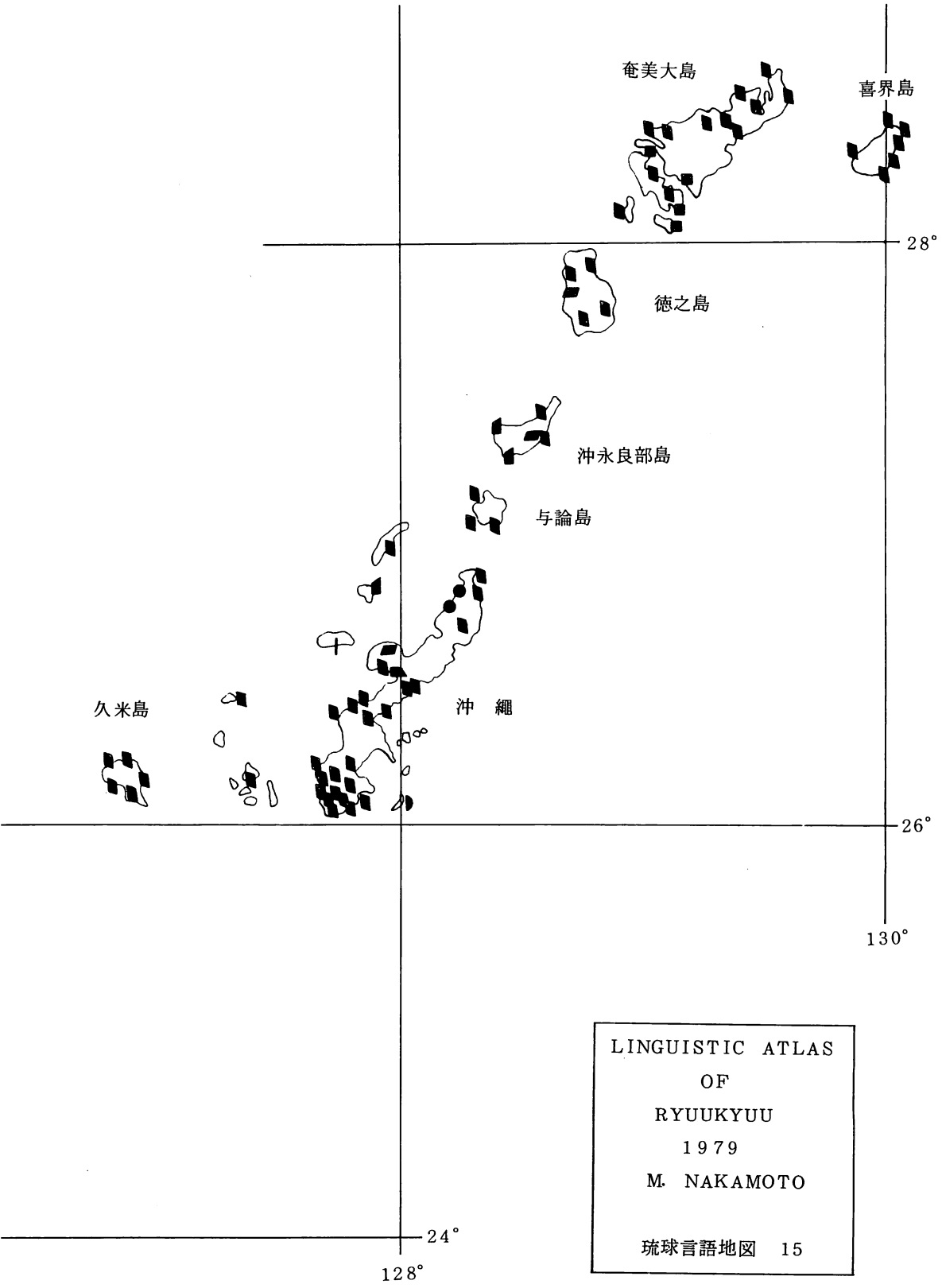
tabï　tapï　tadi

tawi　tai

サビ系　sabi　r̥abi



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　15

Hosei University Repository

乳

ティー系 □ tiː

チ　系 ◀ tʃʔi　▶ tʃʔiː

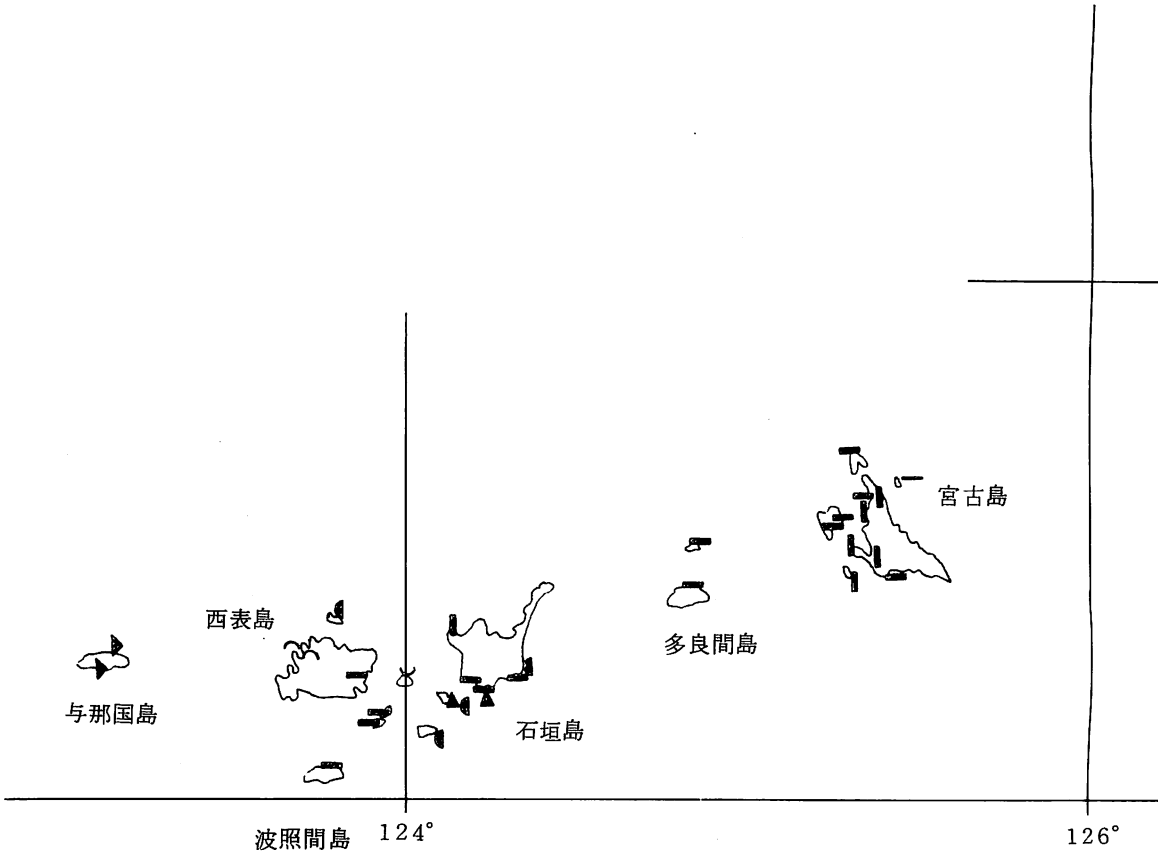
▲ tʃiː

◆ tsʔï　◆ tsʔïː

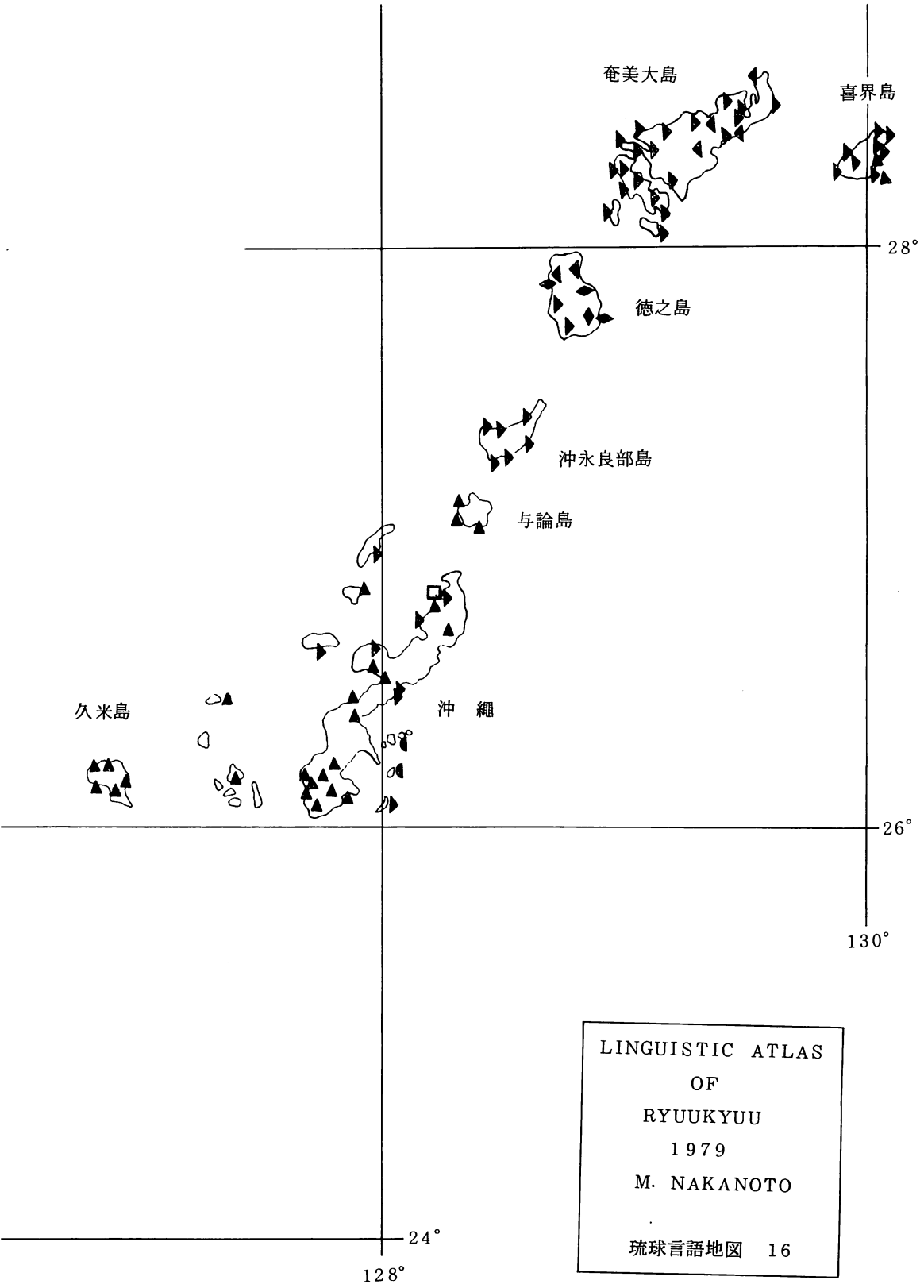
▮ tsïsï　▬ tsïː　— kïː

シー系 ◖ ʃiː

ツァー系 ◡ tsaːma　∩ tʃaː̃



Hosei University Repository



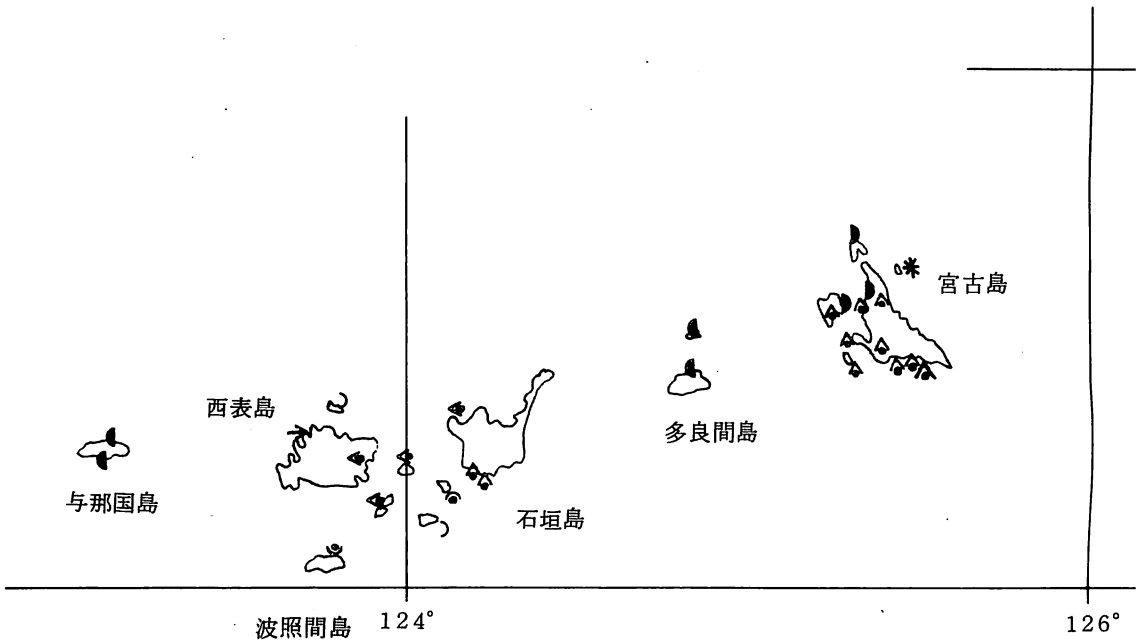
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKANOTO

琉球言語地図　16

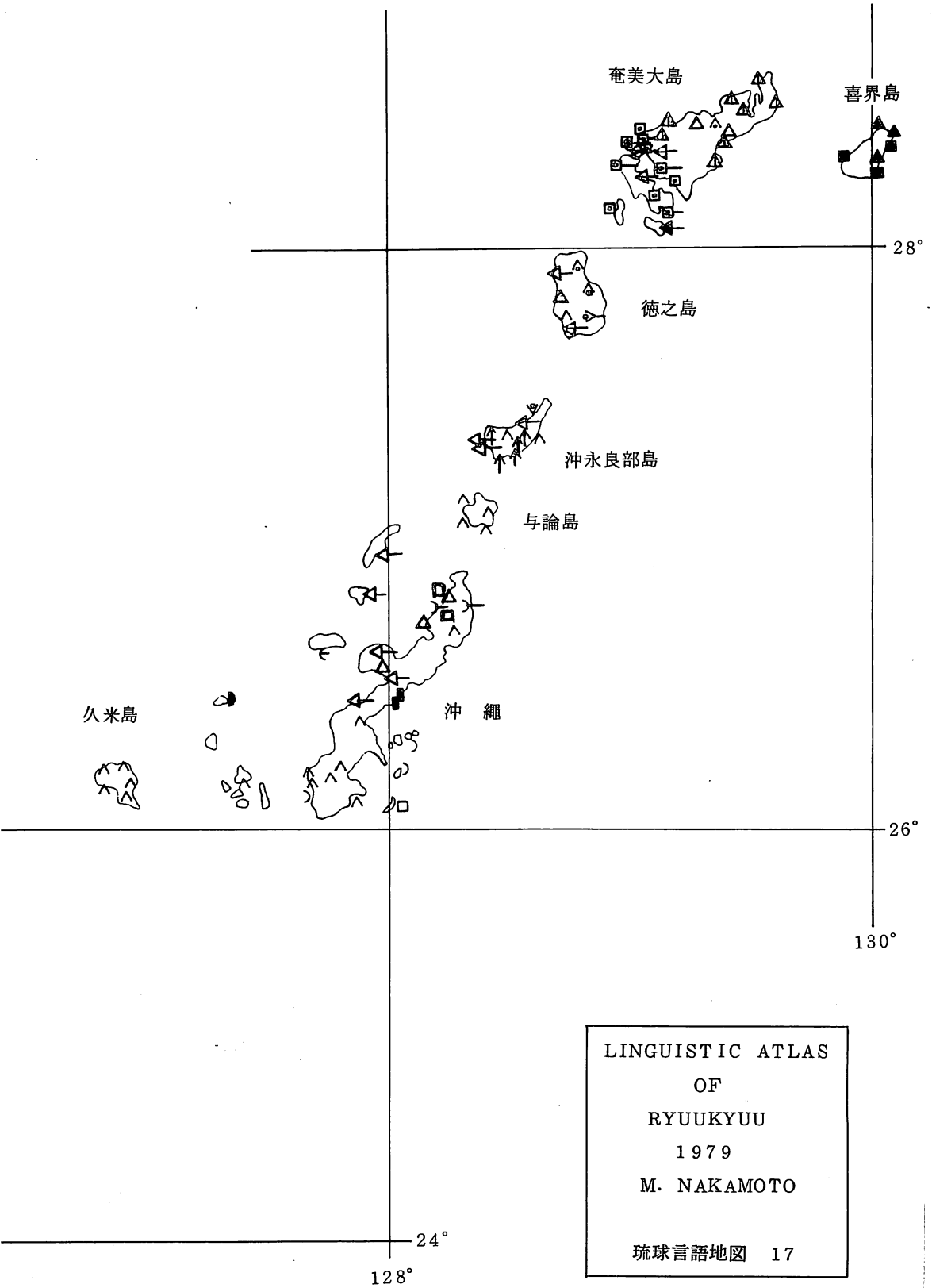
Hosei University Repository

綱

ティナ系	t^{ʔ}ïna	t^{ʔ}ïna:	t^{ʔ}Ina:	
	t^{ʔ}ina			
トゥナ系	t^{ʔ}una			
チナ系	ts^{ʔ}ïna	ts^{ʔ}ïna:		
	tʃ^{ʔ}ina	tʃ^{ʔ}ina:		
	tsïna	tsïna:	tsIna	tsi̥na
	tʃina	tʃina:	tʃi̥na	
ツナ系	ts^{ʔ}una	ts^{ʔ}una:		
	tsuna:			
キナ系	kïna			
シナ系	sïna	si̥na		
	ʃina	sina:	çina	
ンナ系	nna	n̥na		



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　17

Hosei University Repository

手

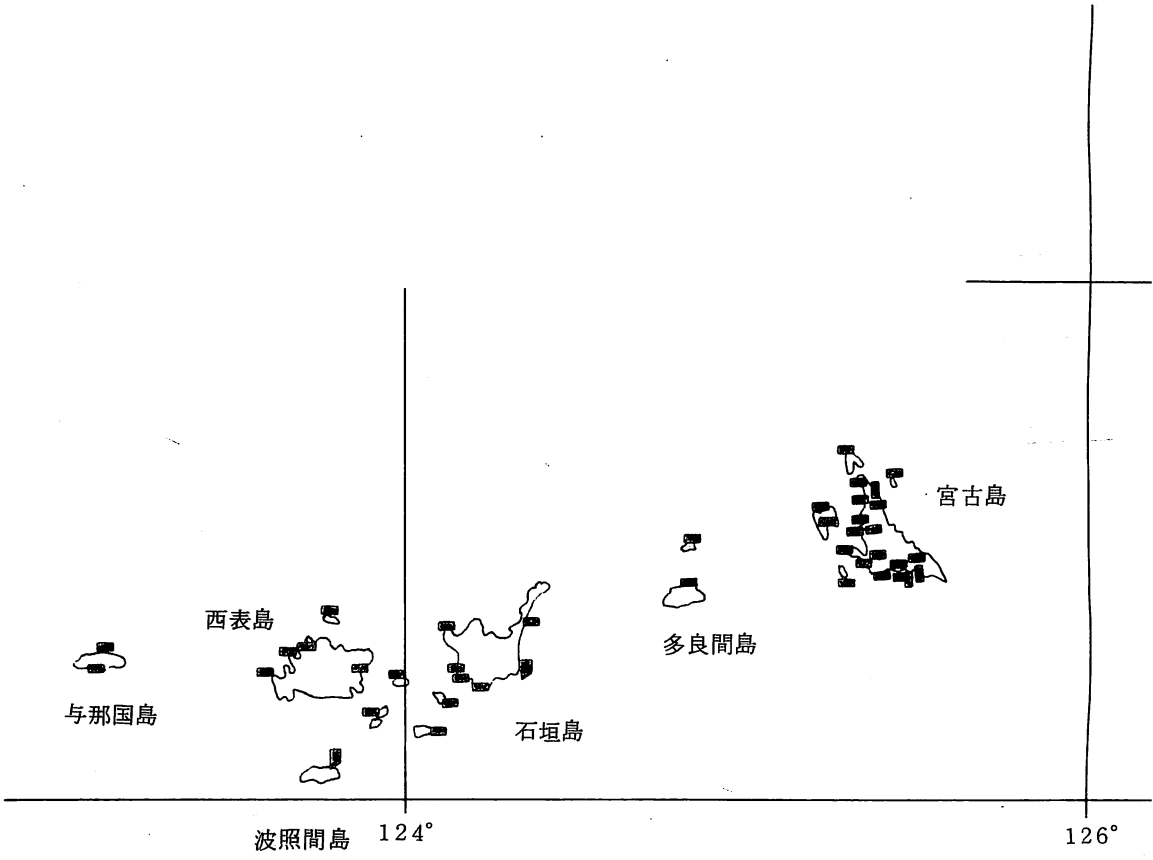
ティー系 tï　tïː　tlː

tiː

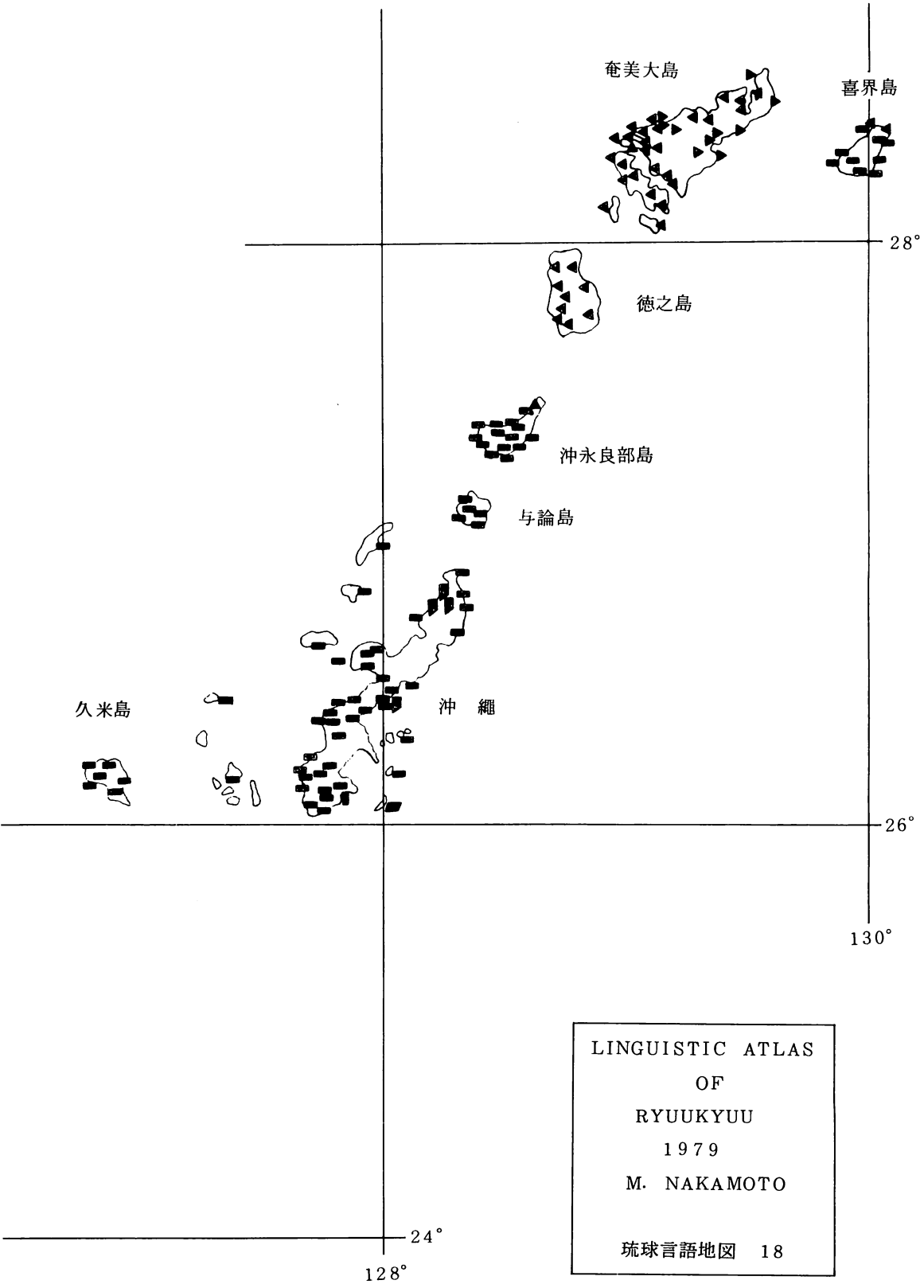
チー系 tʃiː

シー系 ʃiː

r̥iː



Hosei University Repository



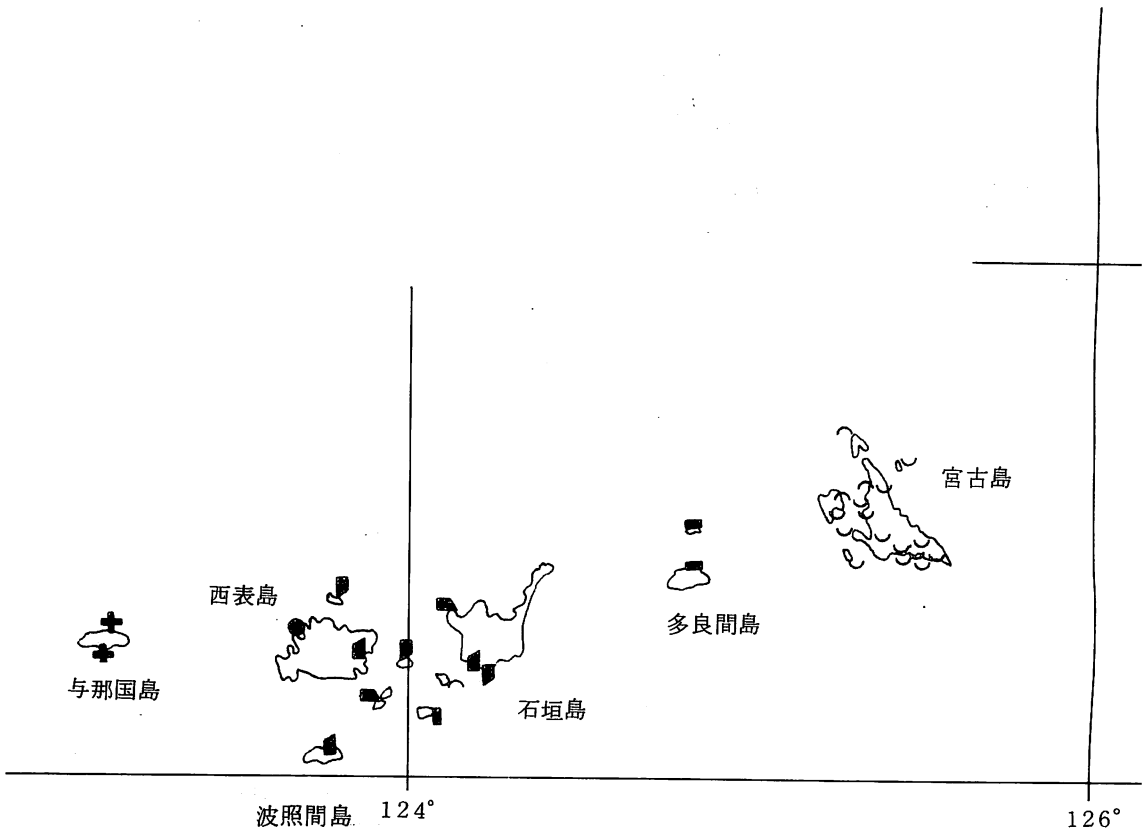
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　18

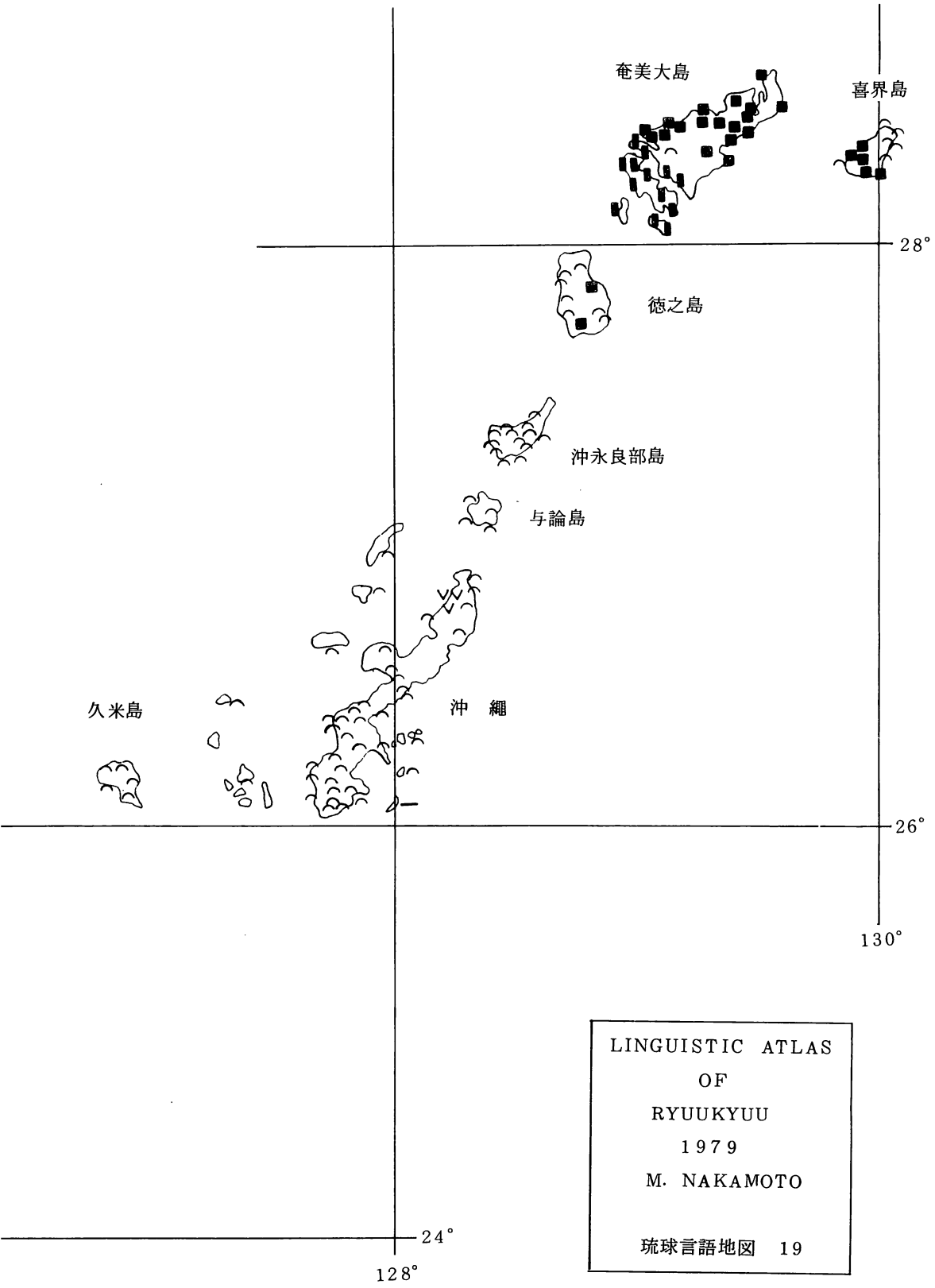
Hosei University Repository

鳥

トリ系	turï	tu̥ri̥ï	turu
	turi	tu(ː)r	tul
トイ系	tui	tuï	
	sui		
	ru̥i		
ググ系	gugu		
ミタ系	mitta		



Hosei University Repository



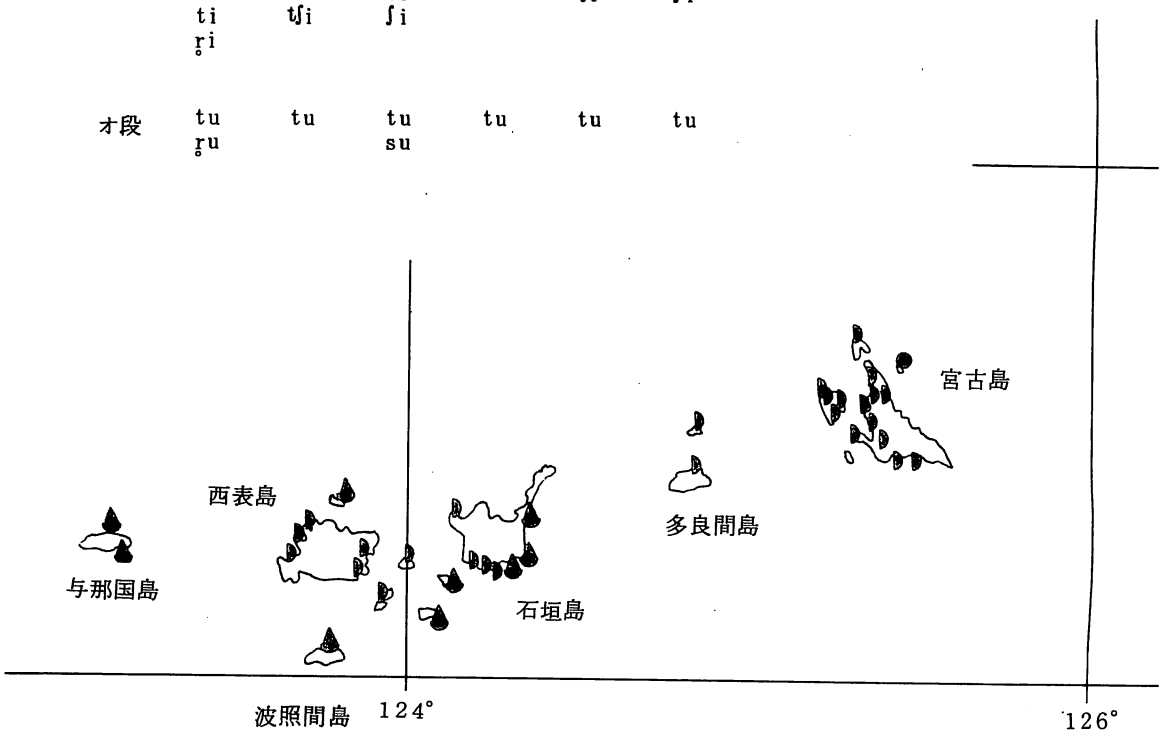
LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　19

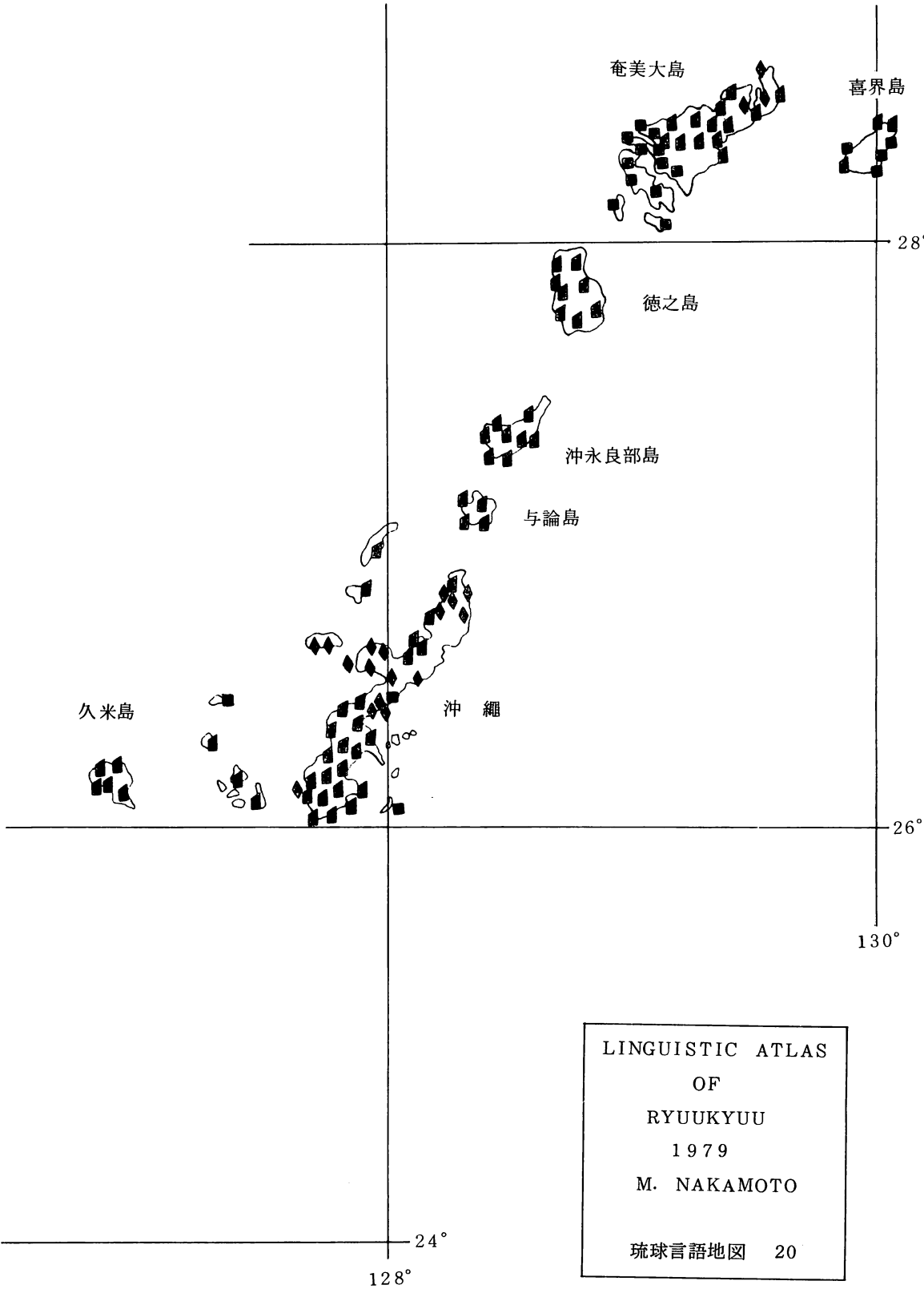
Hosei University Repository

タ行子音の総合図

	A 1	A 2	A 3	B 4	B 5	B 6
ア段	ta r̥a	ta	ta sa	ta	ta	ta
イ段	tʃˀi tʃi	tʃˀi tsï tʃi	tˀi tʃˀi tʃi çi ʃi	kï	tsï tʃi	tsï tʃi tʃˀi sï ʃi
ウ段	tˀï tˀɪ tˀi tˀu ti tu	tsˀï tsˀu tʃˀi tʃi	tˀi tsˀï tʃˀi tʃi sï su ʃi	kï	tsï tʃi	tsï tʃˀi sï su ʃi
エ段	tï tɪ ti r̥i	tï ti tʃi	tï ti ʃi	ti	ti tʃi	ti ʃi
オ段	tu r̥u	tu	tu su	tu	tu	tu



Hosei University Repository



LINGUISTIC ATLAS
OF
RYUUKYUU
1979
M. NAKAMOTO

琉球言語地図　20